



始



550-571



男
女
竹
子
乙

竹
子
乙

大正
15. 10. 11
内交

男女の戦ひ

其一

蠶の繭を作るが如く、家の奥深く薄闇きところに閉ぢ籠りて、門外一步の自由を許されず、人の妻たるものは只これ家内安全の守り札に封じ込まれ、人の娘たるものは只これ無事息災の函入に置き据ゑられて、ちよいと障れば首も手足も居縮む龜の子を以て理想の注文とせられし一般の婦人も、教育の進歩に伴ひ社會の大勢に手を引かれて今は家の人のみでなく天晴れ世の中の人となりぬ、
それも其筈なり、薄暗き繭の中に閉ぢ籠れる蠶も、時來れば羽を生して蝶と飛ぶ、

ひ戦の女男

「しかし君、蠶は蛹のまゝ繭を煮られて絲になるのが即ち天職で、いはゆる身を殺し

て仁をなすところに最も婦人の尊敬すべき点がある、際限ある生命の數に現在の存在ばかりが尊いもので無いとすれば、やはり女は家を守り家に居て家のために不平なく文句なしに温順しく死んで貰ふべきもんだ、うかく羽を生して飛び出されちやア困るよ、家内不安全で天下不太平の基だ」

「いや君、そりやア、あまり男より見た眼の我まゝで男子本位に過ぎるよ、つまり女を男の犠牲物にした見解で、自然の時を得て繭を破り羽を生し蝶に飛ぶべきものを、殊更人爲的に蛹のまゝ封じ込んで煮殺しちやア残酷だ、よし蝶に飛び出しても後の繭から絲は取れるぜ、たゞ丸煮の絲よりは多少の低減があるのみだ、加之も蝶になればこそ雌雄相合して蠶種の盡きざる點を見れば、なほさら君、さう婦人に重い注文ばかり脊負はしちやア氣の毒だよ、弱い音を吐くといふ意味でなく實際に於て、我々男子は常に絶えず婦人より活動の慰安を與へられて居るぢやアないか、その婦

人を家の世帯道具と一般の取扱ひは猶更以て相濟まぬ理由だ、たとひ世帯道具にしろ、なくてはならない必要上、これを粗末に扱へないものとすれば、いよく人道上の罪悪だ」

「いづれが是か非か、兎も角これが今日の男より女に向ふ研究問題の主要とすれば、この研究問題に對して婦人の自覺と自信上、いかなる解決を與へらるゝや、近來その解答案の相談場所として、新に設立されしものを婦人倶楽部といふ、

婦人倶楽部は東京の丸の内にあり、その堅牢と美觀とを争うて立並ぶ諸官省と諸會社よりも寧ろ高く雲に聳えて巍々たる鐵骨石皮の大構造、あれが優しい奥様お嬢様の臍線金と巾着錢を集めて建築されしかと思へば、天下の男子たるもの脚下の御用心、うか／＼しては居られず、第一あの中で絶えず男に對する祕密の相談せらるゝかと思へ

ば、いよく薄氣味悪く恐ろしく、逆も蠶が蝶になるぐらゐの譬を以て敵し難し、婦人倶楽部の世間に標榜するところは、社會の大勢に促されし今日の必要上、これに應ずる女子の自分を穩健なる態度に講究すべき理想的集會所なりと、

されど、多少その内容を窺へば、生理的の異なる以外、男女ともに同一の人類として總ての資格を社會上に得んとする要求所なり、さらに遠慮なく踏み込んで評すれば、古來より幾千年間、男子の隸屬物とせられ玩弄物とせられし復仇的にして、實は武装せる挑戦状態の參謀本部なり、

この婦人倶楽部に於ける規定は大要と細則との二種ありて、その細則は多く物質的の經營上に屬せるものなれど、その大要は多く精神的の結合に屬せるもの、試みに大要中の二三を擧ぐれば、

○婦人倶楽部は婦人天賦の權能を遺憾なく發揮し、更に婦人の神聖を保護すべきた

めに起る、

○婦人倶楽部は人類の自然に應じ社會の大勢に隨ひ、個々の自覺と自信とを以て精神的に組織せられたるものとす、

○婦人倶楽部は、いかなる場合も絶対に男子の出入を許すべからず、

○婦人倶楽部は婦人として男子より侮辱を蒙りし場合の最も堅固なる城壁たると共に、最も嚴格なる意味を以て其の侮辱に對する手段を取るに躊躇せざるべし、

○婦人倶楽部の會員にして妻たるもの、其良人の門外に於ける總ての品行を監視し若くは探知せんとする場合は、婦人倶楽部の職責上、これに應じて最も秘密に最も精細に調査し報告するの機關を備ふ、

○婦人倶楽部の會員にして妻たるもの、其良人に對して理由ある離婚を要求する場合は、其理由の強き擁護者たると共に清き辯護者たるの任務を帶ぶべし、

○婦人倶樂部の會員にして妻たるもの、其良人より不條理の離婚を強ひられたる場合は、倶樂部の全力を盡して之に當るべし、

○婦人倶樂部は會員の初婚たると再婚たるに拘はらず、倶樂部の認めたる範圍内に於て其媒介者となり其保證者となるべし、

猶この他種々の手厳しき條項あれど、若し男子より侮辱を蒙りし場合は、最も嚴格なる手段を取つて其侮辱を拭ふべしとの一條は、正しく世間一般の男に對して殆ど露骨なる挑戰的の意味を漏らせるのみか、其良人の門外に於ける秘密探偵を行ひ其良人に對する離婚要求の後楯となり萬一其良人より不條理の離婚を受けし場合は倶樂部の全力を注いで大いに爲すところあらんとするの數個條は、文盲の爺婆が本願寺に對する隨喜湯仰の涙よりも寧ろ巧に當世風の潑刺たる妻君を利用し集中し網羅して、今日この婦人倶樂部の俄に勃興せし最大原因は實際これがためなり、

また初婚と再婚とを論ぜず、勢力偉大の婦人擁護者たる此倶樂部が絶えず其中間に介在して未來の良人たるものに文句をいはせぬ保證を與へし一條は、當世風の令嬢をして舊習の情實纏綿に弱き父兄よりも寧ろ深く心丈夫に信賴せしめ歓迎せしめしのみか、別に設けたる細則中、由來婦女子の自己を呼ぶに謙遜的態度より用ひ來りし妾の字を一切嚴禁せるが如き、かゝる微細の點にまで用意周到の手剛き樂を加へたるは、今日の青年男子に對する神經過敏の女學生をして最も名譽的に入會を争はしめし一大原因となりぬ、

一個の營利會社を作るにも、立派な男が首を鳩め膝を交へて小田原評議の多い世の中、べちやくくと姦しい女の寄合に何が出来るものか、なアに結局は芝居見物の相談さ、若し多少の意見が纏まるにしても娛樂的の婦人雜誌を發行するぐらゐるが關の山と高を括りて、實は面白半分は顔を撫でて棧敷の上より見物せる世間一般の男子も、この倶樂

部の設立以來、案外その勢力の勃興以來、俄の油斷大敵に目を剥いて騒ぎ出せしが、既に遅し、既に遅し、今更の後悔、早くも敵に機先を制せられて堂々たる陣營を張られたり、

さア大變、いよゝ大變々々、うかゝすれば男子の方が蠶の繭の如くに煮殺さるゝ珍事出来、

わけて驚いたは、天下一般に妻帯の主人公、

いづれも始めは向河岸の火事と思つて安心せしに、思ひきや火元は我家にありて、まさかと思ひし鼻ア殿、いつの間にもやら入會せしといふ告白に猶更の周章狼狽、加之も入會以來の細君その顔色を窺へば、そろゝ馬力を加へて次第に猛烈の勢ひを示され、もし悪く離婚沙汰でも持ち出せば、それこそ廣告的の槍玉に擧げられ、忽ち俱樂部の全力を盡して攻め寄せ來るといふ條項に、主人公いよゝ色を失ひ腸を縮めて、や

ア、えらい事になつて來た、

現在いまだ其妻の入會せざるところも、おのゝ近火の延焼に恐れて青くなれば、細君ますます俱樂部の有難味を感じて、ねエ良人、良人にさへ疚しい點がなければ入會しても宜しいでせう、つまり自分の妻を俱樂部の會員たらしめるは、家庭の圓滿と良人の品行方正とを證據立てる理由ですからねエ、亭主殿、おもはず半泣の澁面を作りて曰く、いかにも御意の通り、左様で御坐いますよ、どうか御手柔かに願ひます、いはゆる決河の奔流、滔々たる此の勢ひを以て入會するもの日夜に絶えず、ために婦人俱樂部の勢力いよゝ加はり、組織ますます固くなるに従ひ、これが旦那殿たるも猶更の大恐慌、じつとしては居られず、をりゝ竊に相會して防禦策を講ずれば、ふしぎに忽ち其秘密を探り出されて、細君の返り討に逢ひ俱樂部の總攻撃に出喰はしぬ、

こいつ堪らぬと、仕方なしの洒落半分に遁げ出せば、はや既に婦人を侮辱せりとて飽まで追窮され、やア蒼蠅いと横になれば、すぐに開き直ツて眞正面より蒼蠅い理由を詰問され、とても遣り切れぬと座を起てば、その前に立塞がツて俱樂部の規則書を鼻頭へ突き付けられ、加之も良人たるものが妻に對して迎も遣り切れぬといふ結果、どうなりますかと最後の解決を迫らる、

たゞでさへ平生の手に餘りし勢ひ盛んの細君を持ちし亭主殿、その細君が婦人俱樂部の會員も會員、一躍して幹事となりし勢力の發展以來、あはれや日々夜々の事々物々に叱り飛ばされ責め抜かれて半病人となりしが、瘦せ衰へたる身を横たへながら歎聲を漏らして曰く、あゝ人間生れて男子たる勿れ、

されど、天下いまだ男子に生れし歎聲を發するが如き意氣地なしの社會にあらず、まして婦人の挑戰態度に恐れて和睦を申し込み慌てゝ白旗を樹つるが如き腰ぬけ共の寄

合にあらず、寧ろ婦人俱樂部の極端なる主義と手段とに憤慨の結果、いよゝこゝに反抗的の同志相結んで男子俱樂部の設立を見るに至りぬ、
男子俱樂部急設の假事務所より發せし主意書の一節は、わざと殊更に卑近なる俗語を用ひて曰く、

捨て、置いても差支へなけれど、折角の思召に對し一片の答禮として茲に男子俱樂部を設立いたし候、

憲法上の運用として、政黨政治の一起一倒に行はるゝ今日、人生向上の自然として、社會の大勢に促されし婦人俱樂部と男子俱樂部とは、兩々こゝに相對して、如何なる結果を來すべきや、

餘儀なき時勢の要求か、來るべき自然の趨勢か、但しは現代的を遺憾なからしめし虚榮心の集合力か、ひがみ根性に間違うた不料簡の固結か、乃至また個人としての女は弱し、弱きがために男の玩弄物とせられし過去の無念を晴らさんとする共同一致の復讐的か、いづれにせよ向側に廻されたる男子の油斷大敵、例の婦人俱樂部が一時に勃興せし以來、わけて良人に對する細君の勢ひは俄に猛烈を加へ出したり、これに對して起れる男子俱樂部は、残念ながら聊か機先を制せられし立後れの憾ありて、丸の内に堂々たる鐵骨石皮の敵營は既に戰闘準備を整へしに、味方いまだ京橋の裏通りに一時的の假事務所たるを免れず、加之も今日なほ設立の計畫中に屬せるが爲め、會員の加入よりも實は幹部の議論紛々、兎も角も癩癩まぎれの冷笑的に主意書の一節のみを掲げて『捨て、置いても差支へなけれど、折角の思召に對し一片の答禮として茲に男子俱樂部を設立した候』との一矢

を酬いしが、婦人俱樂部これに應じて曰く、捨て、置いて差支へなければ御遠慮なく捨置き下されたく候、御繁忙中わざわざ答禮には及び申さず候、この挨拶に猶更以て捨て置けぬ次第となり、いよく今日は幹部の總出頭、事務所の會議室に幹事長の演説となりぬ、幹事長は田口雄太郎とて、ある一大銀行の支配人、經濟界には當時有數の手腕家を以て稱せられ、交際界には洒落滑稽の通人を以て聞えながら、今日は案外の大真面目に苦蟲を噛み潰せし如く、加之も婦人俱樂部の穩かならざる態度に對して不平滿々の顔色、年輩は浮世の裏も表も自由自在に通りぬけし分別盛りの四十二三、聽衆は男子俱樂部の幹部に屬せる三十餘人、兼てより田口の爲人を知れるがため、猶更の興味に我を忘れて一時の拍手喝采、

田口幹事長、髭面の眼鏡越を光らして、軽き一禮と共に演説よりも寧ろ殆ど坐談的口調、流石に慣れたものなり、

「諸君、これは演説でない、既に同一の主義を以て集まれる諸君に對して、加之も其幹部たる諸君に對して、其一人の拙者が、わざわざ殊更に仔細らしく演説する必要は認めません、つまり打ち解けた坐談的の御相談かたぐいです、言葉に綾もなく歯に絹させず思ふ存分ありのまゝに饒舌りますから、諸君の方でも、どうか其お覺悟で聽いて戴きたい、申さばお互に他事では御坐いませんからなア」

(満場どつと思はず笑ふ)

「いや諸君、笑ひごつてない、實際お互の笑ひ事では無い、なか／＼笑つて居れない場合ですよ、御覽なさい、凡そ世の中には随分と無用の建物も多いが、あの丸の内堂々たる鐵骨石皮の大構造、いかにも我々の目觸りぢやアありませんか、まさか

諸君、あんな、どえらい馬鹿けた無用物が此金融逼迫の時節に出來上るとは實際、夢にも思ひませんでしたよ、けち／＼と吝臭い婦人の臍線金や巾着錢で出來たとすれば、飯よりも好きな觀劇の割前にも文句の多い女の力で出來たとすれば、天下の男子たるもの、茫然と、うか／＼して居れますか、胸倉を取られたぐらゐで無い、もはや既に向脛へ噛り付かれましたぜ、こゝでこそ演説口調だ、あゝ諸君よ諸君、きのふまで女らしく優しかりし我々の妻は、あの婦人倶楽部の設立以來、殆ど一時に狂犬と化しました」

(満場の拍手喝采)

「現に拙者の家庭内に於ける、急激の一大變化を眼前の立證に舉げます、不肖ながら田口雄太郎、多少は社會の或る方面に存在を認めらるゝ一家の主人として、かゝる事を自白するのは實に苦しい、いや、隠蔽すべき筈の事ですが、奈何せん自ら進ん

で告白せざるを得ない今日の事情に迫りました」

(同情々々)

「は、ア、諸君も皆、それ／＼相應に遺憾なく、やられてますな、御同様さまだ、ぢやア同病相憐れむの理より猶更以て隠さず恥ぢず露骨に告白します、實は拙者の妻なるもの、嫁し來つて十餘年の近來までは、さのみ眼に立つほどの尖つた圭角のある女でなく、いづれかといへば寧ろ滑らかに内氣の圓滑いもので、何事も只これ殆ど拙者の命に従うて來た柔順な奴ですが、あの婦人俱樂部へ加入以來、恐るべし悲しむべし俄に態度一變、急に妙な調子を帯びて、昨今の拙者に對するところ、まるで別人の如しだ、實は敵ながらも婦人俱樂部の其會員を吸收し煽動し同化せしむるの力に驚きましたね、最も手近な一例を舉ぐれば、誰しも世間普通、自分の妻を客に對うて賢妻とも賢夫人ともいふ馬鹿アない、やはり口に慣れた愚妻と稱する其言葉

にまで、近ごろは大いに面を膨らして、良人、愚妻とは全體どういふ意味ですかと吐す、言語道斷の沙汰、怪しからんぢやアありませんか、ところで拙者、勢ひ黙つて居れますかい、さらぬも癩に觸つて堪らない折柄だ、なアに手前なんかア愚妻も實は分に過ぎた言葉だ、今までは他人に對して謙遜的に愚妻と稱したが今日より改めて愚妻と稱する、さう思へと大喝一聲の果は諸君、この喧嘩、どうなつたと思ひます、もし九尺二間の裏店なら、忽ち皿は飛び土瓶は割れて摺鉢と摺子木の立廻り、取組合が始まらざるを得ない場合です、幸ひ、流石に、それほどでもないが其後の愚妻、いや愚妻め、何をするかと窺へば、夕飯も食はず奥の一室に閉ぢ籠つて、頻りに俱樂部の趣意書を妙な面で捻くり廻した翌日、つまり今朝です、早朝に俵を命じて出掛けようとするから、どこへ行くと問へば、ちよいと丸の内までと吐す、事ここに至つては拙者いよく黙つて居れない、丸の内でも角の外でも勝手に出て

行け、しかし俾は許さない、家庭上の必要か乃至また良人の命にあらざれば無用の乗車、まかりならん」と怒鳴つて拙者の方が先へ出ましたが、いづれ妻は婦人倶楽部から拙者は現在この事務所から雙方、家へ歸つての今夜が、さアどうなりますか、もとより形勢不穩、いよく事だ、とても無事に治まる筈がない、さらに何の關係もない他より見れば頗る面白い趣味のある問題でせうが、さて本人の拙者に取つては實に、實に淺ましい、なさけない、忍び難く堪へ難い不愉快の極です、苟も諸君、ちよいとした手軽い手近な一例が、これだ、もしこれ以上この勢ひを以て進めば夫婦なるもの、わけて人生裏面の波瀾を生じ易い家庭なるものは、悲しい哉、かかる妻の態度一變によりて事實いかなる不幸を來しますか、否、決して一時に限られたる一家の不安と不幸のみに止まらぬ、かの婦人倶楽部は其不幸と不安とを寧ろ喜んで迎へ、加之も得意的に獎勵し教唆し煽動するがために出來たバチルスの養

成地で、正しく男女の圓滿を呪ひ夫婦百年の和合を破るべきために出來た惡魔の巢窟だ、つまり人類向上の進歩發展を阻害センとする社會の破壊者だ」

(適切々々、幹事長、今夜の決心奈何)

「今夜の決心ですか、今夜の決心は申すまでもない、あの惡魔倶楽部より、いかに誘惑され、いかに煽動され、いかに教唆されて歸り來るか、妻の態度は忽ち拙者の決心で、斷然たる處置を取ります、服従すべき約束の下に嫁し來りながら良人たる拙者に向うて拙者の主義に反抗する以上、一度これを諫め、これを教へ、これを導いて後、なほ度し難ければ餘儀なく叩き出すの外なしだ、無論、婦人倶楽部全體の相手としての喧嘩は覺悟の前だ、たとひ拙者に妻を去るべき立派の理由ありとも、かれ倶楽部は其趣意書に示せるが如く、婦人倶楽部の會員にして妻たるもの其良人より不條理の離婚を強ひられたる場合は倶楽部の全力を盡して之に當るべしといふ條

項へ、無理にも持ち込で襲ひ来るは必然の勢ひ、寧ろ迎へて大いに戦ふ決心です、乞ふ諸君、いづれ諸君にも餘波の及ぶべきこつたから、片唾を呑み手ぐすね引いて先づ拙者の喧嘩振を見物し給へ、こゝに男子倶楽部の幹事長となつて諸君に推されたる田口雄太郎、時に取つて一身一家の不幸は不幸ながら、事こゝに至つては、もはや致し方がない、十餘年來の妻を去り家庭を破り多少の財産を犠牲に供しても敢て辭するところで無い、我々と同感を抱ける天下妻帯者のため、また前途あの婦人倶楽部に悩まざるべき天下青年男子のため、徒らに机上の空論は無効だ、あまり幸ひでないが、この田口雄太郎、現在に身を以て事實上に戦ふ覺悟です」

(痛快々々、しツかり頼みます)

「いや、さう調子に乗せられては困るが、實際その覺悟です、しツかり遣るに及ばない、氣の毒だから好い加減にして置けといはれても、事こゝに至つた本人の拙者、や

るところまで遣らずに居れない場合だ、考へて貰ひたい、實は今日まで無事に連れ添うて来て、さのみ憎くもない女房を諸君あの倶楽部の勃興以來、いはゞ棒に振つて仕舞つた理由ですからなア、はゝゝゝついでに甚だ淺薄な議論ですが、拙者の男に關する主義の大要だけ、あらかじめ掻い抓んで、諸君の清聽を乞うて置きたい」

(謹聽々々)

「全體この男女といふのは男と女の異なる二個で、たゞ單に人といふ名稱の下にこそ同一のものながら、男と女は全然これ別種のものでなければならぬ、その體質に於て、その天職に於て、その他あらゆる一切の賦與せられた自然の機能に於て、男と女は全然これ別種のものに出来て居る、然るに近來、どこの狼狽者が騒ぎ出した藝か知らないが、この男と女を人といふ名稱以外の事實にまで混同せんとする結果、甚だしきは國家の參政權を得んとする海外の大間違ひを歓迎して、そろく我

國の婦人また政治的能力ありと荷ぎ廻る突飛の馬鹿者がある、しかし馬鹿さ加減も事ごとくに至りては寧ろ滑稽ではありませんか」

(同感々々)

「要するところ、大風に灰を蒔いたやうな漠然たる男女同権の説その因をなし、女も男と等しき高等教育を受け得らるゝ以上また等しき國家を負擔し國家を料理すべきものであるといふ理由の下に起つたらしい、つまり女が自己の分際を忘れ天授の任務を捨て、男の領分へ練馬大根のやうな白く短く發育の不十分なる片足を踏み込んで來たので、さりとては諸君、あまり場所柄を辨へざる無遠慮千萬ではありませんか、そもく我々が遠き祖先の原始時代に於てこそ、いまだ單純なる人類の下に一括せられて分化顯著の必要も薄く、従つて有形無形ともに殆ど判然たる男女の差別が無かつたにしろ、その人類ますく次第に高等に向ひ、社會いよく順序の文明に

達せる今日、分業は進歩の立證たるべき眼前の實例を破りて、折角こゝまで異性の個々に向上發展せる男女また再び原始時代の野蠻的に混同の逆戻りするとは、言語道斷、奇怪至極である、また近來の女流なるもの、動もすれば男に服従するを以て拭ふべからざる恥辱の如くに心得、男に使命せらるゝを以て自己を傷つけ自己を弄ばるゝが如くに考へ、その極は自己より勝手次第に好きな男でも選んで首尾よく目的を達すれば兎も角、もし男の方より不意に縁談でも申し込まれた時は、まるで勝負の立合に負けたやうな顔色を現はし、さらに甚だしきは獨身生活を以て天晴れ男に楯を突けるが如く誇れるものがある、不料簡も不料簡、あまりの不料簡に呆れて實は諸君、叱るほどの價值も無いぢやありませんか、醫學上、どうしても争ふ事の出来ない生理的の根本より、第一に大切なる頭蓋の状態、腦髓の容積、骨格の構造、筋肉の發育、皮膚の彈力、血液の重量、身長と比較、容貌の大小強弱、そ

の他に組織されたる總ての形状と實質とに於て、いやしくも男性に勝るべき剛健の一點だも諸君、ありや否や、まして妊娠と分娩と生兒哺育の大任は男に譲るべからざる絶對の天職を帯びて、加之も内にありて其天職を全うすべき分業の生理的に作られて居るではありませんか」

「まして婦人の生涯中、最も成熟せる間は月に一回づゝの子宮出血、とても人間業では免るゝ事の出来ない月經なるものがあつて、その月經のため生殖機能の全身に及ぶべき變化は頗る著しく實に恐ろしいもので、専門家の正確なる統計上、この月經時には性質の徳義心も修養の自制力も俄に衰退し或は消滅して、外來の刺戟に動搖し易く誘惑され易く、嫉妬、偏執、猜疑、怨恨は固より姦通、放火、殺人、竊盜、あらゆる女の不徳と犯罪とは皆この月經時で、さらに事實の立證上、女が精神病者として其生殖器に關せざるもの一切これなしとの事である」

「如何です諸君、動かすべからざる事實を最も有力なる結論とすれば、外に出でて活動すべき生理的の構造上、女は男に對して劣れるといふよりも寧ろ適せずといふが正當の理由で、たとひ假に男女その構造を等しうするも、たとひ嫁せずして妊娠と分娩と生兒哺育の任なしとするも、その生涯中に最も發育せる成熟の間は必ず月に一回づつの恐るべき危険時期を備へた女が、のこゝ世の中に出歩いたり飛び廻られて堪りますかね、風の日火の粉を散らすやうなもんだ、實際また内を守ツて叨りに出歩かず飛び出さないのが婦人の名譽なる天職です」

「つまり男は主なるもの女は従なるもので、いかに争うても騒いでも事實は受太刀たるを免れない、ところで良人の妻たるを嫌ひ子の母たるを厭ふが如きは、女として自個の天分を蹂躪せる人道上の罪惡といはねばならない、どれほど苦しい餘儀ない事情あるにせよ、いかに世間より惜まるゝ藝術のためにもせよ、事情と藝術の故を

以て女の獨身生活は恕すべからず、否、斷じて許せない、もし許せば精神に異常ある一種の狂病者として取扱はざるを得ない」

「以上これを一括すれば、男は元來の構造と天職とに於て社會に活動すべき任務を有し、女は元來の構造と天職とに於て家庭の人たるべき任務を有して居る」

「さらに専門家の立證には、また恐るべきものがあります、外でもない、近來の高等教育を受くるに従ひ女子の月經ますます不規則になつて、加之も生殖器に多少の自然を缺いた障碍の無いものはなく、それがため高等教育を受けしものは統計上、受けざるものより遙に難産の數は多く産後の死亡率も頗る多いとの事であり、して見れば男子に及ばざる體質以外、免れ難き月經は非常の波動を起し、生殖器に全身の變化を支配せらるゝ女子の腦髓は、先天的に於て男子と等しく過度の使用に堪へざるものである」

「この生理的の構造と先天的の作用上、到底、女子は男子の領分へ侵入すべきものではない、人類の幸福を増進する上に於ても、社會の秩序を保つ上に於ても、女は男の從であり副である、判然、どこまでも明白に男子と女子の任務上を分たなければならぬ」

「つまり女の男に對して最も強き意味は、その男と争はず競はざる愛と美の優しい點で、妻の良人に對うて最も強き意味は、その良人に從うて子の母となり家庭の主婦となるがため、一切その他に於て彼等の強き意味は諸君、どこにありますか、男の女に對して敬意を拂ひ良人の妻に對して感謝するものも實際これがためではありませんか」

「然るに近來の彼等その最も強き意味を自ら破り自ら失うて男に對し良人に向ひ、その最も弱く不得手なる短所のみを擧げて我々男子の誇るべき長所に反抗し來らんと」

する馬鹿さ加減、そこが所謂女の智慧で、實は憐れむべきモンですが、たゞ憐れんで居ては彼等、どこまで圖に乗ツて來るかも知れない、現に今日の婦人俱樂部なるものが何よりも第一の證據です」

「そもく、男子をして外に奮闘せしめ努力せしめ向上せしめ發展せしむるもの、内を守り内に在りて清き笑と優しき心とに我々の出づるを送り歸るを迎へてくれる女子の賜物と思へばこそ、をりくは腫物に觸るが如く機嫌を取ツて、常に絶えず可愛がツてもやるし、また内心は嫌々なが多少の無理も通して好きな真似もさしてやるに拘はらず、この我々男子を元來甘いものと心得て、怪しからん無禮の振舞を仕出した近來の彼等は、諸君、人道のため社會のため、どうしても此際に一撃を喰らはさねばなりません、その先鋒として田口雄太郎、現に十餘年來の妻を去るべき決心と、例の婦人俱樂部全體を敵に取るの覺悟で、大に戦ひますから諸君、また拙者の後

陣に控へて、所謂聲援ばかりでは無効です、いざといふ場合は等しく戦線上に立現はれ猛烈なる一齋射撃の下に彼等を粉碎するの用意を願ひたい」

聽衆は僅に三十餘人の幹部のみなれども、破るゝばかりの熱狂に満堂の拍手喝采、果は田口雄太郎を胴上げにしての大騒ぎ、いづれも皆これ其細君を婦人俱樂部の會員に吸収されし以來、甚だ面白からざる不平滿々の旦那殿なり、

京橋の裏通り男子俱樂部設立の事務所三十餘人の幹部員相集まりて、その幹事長たる田口雄太郎の演説内容は知るを得ざるも、たしかに悲憤の熱烈を以て決戦の意を示せしことだけは兼ての油断なく加之も不思議に巧なる斥候によりて早くも敵の知るところとなりし結果、丸の内の婦人俱樂部また同時に幹部の秘密會議を始めしが、恬淡にして痛快なる男子の態度とは違ひ、いはゞ陰險にして沈鬱なる女子の性格を遺憾な

く鐵骨石皮の奥深く閉ぢ籠らせて、いかなる策戦計畫を施せしか、殆ど人なき如く聲も漏れざるだけに猶更薄氣味わるく物凄し、

砲火いまだ相交へざるも、いよくこゝに決戦の時期は迫り來りて、天下の男女に不安の念と恐怖の念とを抱かしめ社會あらゆる方面の家底に風雲の急を告げし男子俱樂部と婦人俱樂部とは、今や將に互に火蓋を切らんとす、

普通の會員全體に直接の利害を波及するには、なほ幾何の時日あれど、雙方の幹部員として機密に與りしもの、おのゝ家に歸りて妻に對する良人の顔色、良人に對する妻の顔色、何とやら變に妙な工合なり、

中には寢酒の一杯も飲んで微醉機嫌に忽ち其夜の和睦をするものもあれど、また中に

は無言のまゝ殊更に閨を隔て、俄の他人行儀に意地を張り通す夫婦あり、これ幸ひの機を逸すべからずと何處へやら飛び出して行方の知れぬ旦那殿あれば、さてこそと平生の嫉妬不平ますます一時に爆發して俱樂部へ電話の頻々たる細君あり、或は女房の手強き談判に責め抜かれて絶對絶命、ぎゆう〜といはされし果に今更返り忠の意思薄弱なる亭主あり、或は横面の一撃も喰はしかねぬ亭主の權幕に恐れて内々そつと降参する女房あり、

これを面白半分に身錢を切ツて駈け廻る彌次馬、勝敗の決は我々の前途に重大の關係ありと俾を飛ばして狂奔せる未婚者、先を争うて策戦計畫の祕密を探知せんとする新聞記者、萬一の取締上に眼を輝かす警察眼、傳染病の猖獗よりも恐れて内外を警戒する父兄の心配、惚れた鼻アに遁けられし寡夫が癩癩まぎれの力瘤、良人を失ひし未亡人が俄に氣を取直す大騒ぎ、十中の八九まで整ひかけし折角の縁談も晴雨いづれへか

暫ら躊躇するほどの影響を來して、いまだ衝突の事實その外面に暴露せざるだけ猶更に危険思想を傳播し、満都これがために熱狂の絶頂に達しぬ、

「おい君、いよく始まるらしいぜ」

「さア、らしいね」

「僕ア幸ひ雙方の幹部員に知己を持つてゐるから、内々それとなく探ツて見たがね、や、風雲ますます急なり、頗る形勢不穩だ、しかし面白いね君、實際、こんな面白い喧嘩アないぜ」

「全くだ、お互に我々のやうな前途を控へた未婚者には、猶更以て面白い、骨鳴り凶動くとは此こつた、人生これ以上の趣味と實益と併せ得た痛快事は、無いんだからねエ、しかし折角こゝまで漕ぎ付けた途中で、をかしく變な奴が杓子定規を振り廻

して餘計な仲裁者に飛び出さなけりやア宜いと思ツてるんだ、どしくやるだけ遣ツてくれりやア結局、我々の利益だよ」

「無論だね、社會の進歩は時日と手數とを省いて個々別々の交渉より團結力の勝敗に移ツて來た證據だ、世の中も段々と進んで來たからね、今まで長火鉢や筆筒の前で人知れず胸倉を取ツたり取られたりした夫婦喧嘩が、いよく大びらに巨くなツた理由だよ、はゝゝゝ」

「ところで君ア全體、どツちだ、どツちへ味方する覺悟だ」

「馬鹿アいふない、僕は男だよ」

「男は知れてるさ、君ばかりぢやアない、僕だツて男だ、しかし君、この男なるものは或意味に於て、女に對する男だぜ、女を離れて男なるものゝ存在は、無意味に終るぜ」

「だからさ、女に對する男なるが故に今度の喧嘩が始まるぢやアないか」

「そこだ、その大喧嘩も實は、正直に告白すれば君、あまり好んで爲たくない喧嘩だからなア、つまり戦はざるを得ない勢ひの下に餘儀なく戦ふ所以で、雨が降って地が固まると一般、戦争の目的は和睦にありさ」

「おや、此奴、怪しいぞ」

「なアに決して、怪しくない」

「怪しくない事があるもんか、まだ喧嘩の始まらない前から、さういふ意見ぢやア、頗る怪しまざるを得ない、たとひ戦争の目的は最後の和睦にありとするも、始めから和睦の目的で戦争が出来るか、加之も戦争の目的は和睦のみで無い、嚴格なる戦ひの意味は征服にありだ、わけて今度の喧嘩ア君、仲直りの覺悟ぢやアないぞ、可愛がれば温順しく可愛がられて居るべき筈の奴が、ぶうくして調子に乗って自

己の分際も辨へず我々男子に向ひ楯を突かうとするから起つた事だ、實は我々男子のためで無く、寧ろ彼等女子のために間違つた料簡を矯め直してやるんだ、凡そ生きて動く地球上の産物に同権といふ事があるもんか、同権とは理論上の氣休めだ、平均上の統計表だ、まして有形無形とも千差萬別のあるべき人間の男女に同権の事實があつて堪るもんか、社會の秩序も國家の進歩も、めちやくだ、しかし面倒だから男女同権も差支へのない言葉の上だけに許してやつたのさ、それを女ども好い氣になりやアがつて、早速事實の上に獲得せんなどは言語道斷の沙汰、怪しからんこつた、その君、怪しからん謀反を征伐する今この時に當つて、妙に變な弱音を發する君は君、いよく怪しからんぞ、全體、かういふ場合に拘はらず君は女に對して、のろいよ、すぐに參るから無効だ、平常から女に對して殆ど無能力者ともいふべき君の惚さ加減を知つてるものは、多少また恕してもくれるが、用心し給へ、

「此際うかくすると君、擲られるぞ」

「おい、おい、おい、おい君、黙ッて聞いて居りやア、をかした事をいふね、戦争の目的が和睦にありといふ、この一言は全體どうして僕の怪しい證據になる、第一、惚いとは何が惚い、この僕が女に對して無能力たる立證を舉げて貰ひたい」

「證據を舉げる、いや、舉げない方が宜からう、あまり證據があり過ぎるから舉げて數ふるに違あらずだ、自分では惚くないと思へばこそ、事實上、さのみ恥づかしくもなく平氣に澄まし込んで、のろくなれるのさ、公平の批評眼は、自個にあらずして他人にありだよ、は、は、は」

「な、何、何だと、朋友だから大概な事ア堪忍するが、此際に於ける僕の頭腦は平生と少々變ッてるぞ、ほんやり冗談には聞かないぞ」

「無論、變ッてるだらう、よほど變ッて居なきア此際に於ける男子の態度として、苟

も君のやうな曖昧になれるもんかね、君なんかア今度の喧嘩を見物するだけの資格もない」

「見物する資格もないッ」

「ないよ」

「よし、そこまで侮辱せられた以上、僕には相當の覺悟がある、いふまでもなく絶交だぞ」

「ありがたい、絶交、結構、天下分目の大戦闘に怪しい奴があられちやア味方の恥辱だ、丸の内の俱樂部へでも駈け付けて、忙しい最中だ、名譽的に御婦人方の草履でも下駄でも揃へて番しろ」

「や、よく吐した、いちく辯解の價值もない、猶更教訓の餘地もない、覺えて居るよ」
「貴様のやうな奴を覺えて居れるかい、今までは不肖ながら朋友の中へ數へてやつた

が、もはや朋友どころか、男の部ぢやアない、さりとて完全な女でもなし、つまり雌に似寄った一種の變態物だな」

「頑冥不靈の徒、あきれて物が言はれない」

「其上、いふ事があるから」

「いうても通じないよ」

「貴様のいふ事が男の耳へ通じないのは當然だ、呆れるよりも諦めろ」

「多言を要せず、たゞ絶交だ、絶交だ」

「くどく、一言で澤山だ」

「ねエ貴嬢、さうなるんでせう、何だか怖いやうですが、また考へて見ると、楽しみですワねエ」

「全くよ、うまれた家庭で父兄の下に服従するのは際限ある期間で、また先天的の關係と養育の恩に對する當然の義務ですが、わざ／＼何も他人の捕虜になる理由でなし、いはゞ人爲的の合意上から契約を結んだ良人の下に屈辱を忍んでまで、生涯を犠牲に供したり玩弄物にされたりする理由がありませんもの」

「ですとも、ねエ、第一、男といふものは、自分の事を棚に上げて置いて、絶えず我まゝ勝手に好きな真似をしながら、まるで眼の仇敵のやうに此方へばかり無理な注文をするんですよ、そも／＼今日の男子なるものに良妻賢母を要求するだけの資格があるんでせうか」

「何、貴嬢、あるもんですか、いや敬意を拂ッてるの、いや愛してるのと言ッても、ありやア男の術ですよ、策略ですよ、あんな事を言ッて、うまく此方を欺すんですよ、つまり眞面目な道理らしい顔で、事實は自分の卑しい獸慾を遂げるための甘言

ですよ、おまけに男といふものは、相手の女が一人や二人で足りないんですワ、人道上に於ける一夫一婦は貴嬢、ほんの名ばかりで、現に争へない事實として、いたるところ醜業婦の盛んなことを御覽なさい、醜業婦も同じ婦人は婦人ですが、あゝいふ意志の薄弱な品性の劣等な道徳心の麻痺した、特殊の階級に属した墮落女子を歓迎して、大騒動するんですもの、それも貴嬢、未婚の青年ばかりかと思へば、寧ろ一家の主人として立派に妻子あるものが却て甚だしいんですよ、過日も或る雑誌に麗々しく法學士の何の某と名乗って、かういふ侮辱を加へたのがあつてよ、そもそも妻なるものは、良人に對して何等の要求すべき権利もない、絶対の服従物だ、たゞこれ命に従うて情慾を満たすの具となれば足れり、廣く他人に淫を囁ぐもの、これを淫賣と稱し、生涯一定の同人に淫を呈するもの、これを妻といふ、とさ、まア、どうでせう、いくら何でも、あまり人道を破つた暴言ぢやアありませんか、あ

まり婦人を蹂躪し過ぎた侮辱の極ぢやアありませんか、こんな酷い亂暴な事を載せる雑誌も雑誌ですが、これを取締る方法もないといふのが、やはり貴嬢、男が自分の田へ水を引くやうに都合の宜い勝手な法律ばかり作るからですよ、男より直に姦夫の訴訟は出来ますが、道徳上と宗教以外、女より男の不品行を訴へる手段も道徳もないんですもの、その道徳と宗教さへ男には何の功もない薄弱で、つまり此方ばかり責められる道具ですよ」

「口惜しい事ねエ、そんな憎らしい、酷い事をいふ法學士の顔が、見たい事」

「もし見たら、貴嬢、どうするの」

「口で喰ひ付いて、兩方の手で引ッ搔いてやりますワ、なさけない、そんな人の妻になる婦人が、あるんでせうか、萬一あれば、どうせ今日の女子教育を受けては居ますまいねエ」

「受けても、受けなくツても、そんなのは貴嬢、例外ですよ、また男の方では、口でいふと言はないだけの事で、皆、さういふ料簡で居るんですよ、だから勢ひ、自然の大勢に促されて丸の内の婦人倶楽部も出来たり、今度のやうな態度も執るンぢやアありませんか」

「貴嬢、無論、加入して」

「して居ますとも、趣意書を見た其日、すぐ會員になりましたワ」

「どんな事をして今度は是非、勝ちたい事ねエ」

「今度ばかり勝ツても、つまりませんわ、長く永久に勝たなければ、わたし等の將來に却て不安を増すやうなモンですよ、さうでなくツても、常に絶えず女子を見縊ッて來るのが、男の慣用手段ですもの」

「もし負けたら、それこそ大變ですなエ」

「もし今度、あの婦人倶楽部が負けたとすれば、生涯、わたし、このまゝの獨身で通す覺悟、誰が男の情慾を満たすために誰が妻なる名稱を冀ふモンですか、たとひ善意の解釋より子孫繁殖のためと言はれても、たゞそれだけでは甘んじて居られないんですからなエ」

「わたしも、獨身で通しますワ」

雙方の幹部と幹部とが互に睨み合せて、おのゝ秘密に作戦計畫の眞最中、公然いまだ衝突の幕も開かざるに、いたるところ待ち兼ねし見物の男女、いづれも我を忘れし狂熱に浮かされて、わい／＼べちや／＼、

多年の知己も朋友も一朝の議論に交はりを絶つほどの大騒動、まだ父兄の下にある女子までが前途生涯の獨身を誓ふほどの大恐慌、世間一般は猶更の珍事出来として、日

その新聞記事これがために多大の紙面を奪はれ、いざといふ場合には必ず號外發行の豫定なり、

其三

山嶽震動して鼠一疋の飛び出せし世諺あれど、これは實際の正反對に油斷大敵の大失策、天下の男子が高を括つて、なアに女がといふ安心の下より土鼠の如く、むくくと持ち上りし婦人倶楽部の勢力、加之も其勢力は門外一時の世間を吹き鳴らす議論でなく理窟でなく、寝ても起きても現在の鼻と鼻とを突き合ふ夫婦の間に形勢不穩の狀態を現はして、今までは親に祕すことさへ互に打ち明けし女房が俄に敵となりし心地、いかな場氣な亭主殿も思はず目を剥き出して、豈それ驚かざるを得んやの次第となれり、

されど目を剥いただけでは鼻ア殿、さらに何とも思はぬ今日の勢ひ、亭主殿また驚いただけでは濟まぬ場合、残念ながら餘儀なき必要上、癢に觸れど捨て置けぬ對抗上、こゝに起りし男子倶楽部の幹事長たる田口雄太郎、まづ自己の一家を犠牲に供し十餘年來の夫婦別離を覺悟の前にて戦線に立現はれぬ、洒落の態度と談笑諧謔とを以て聞えたる平生の田口雄太郎とは違ひ、男子倶楽部の幹事會に別人の如き憤激の態度と熱烈なる口吻とを以て一場の演説を試みし今日の田口雄太郎、なほ數人の幹部員と祕密に作戰計畫を議せし後、いよく決心の顔色、ますます奮闘の眼光、今に見る雌ども後悔するなどの概あり、血肉を分けし親子さへ一世の契、夫婦は二世とまでいふ、その二世どころか、いきて現世に半生も過さざる今日今夜、これより家に歸りて天下男女の大決戦に血祭りの夫婦喧嘩を始めんとする田口雄太郎、もし細君に惚い人の眼より見れば、トンでもない

災難の渦中に投ぜしのみか、人生これほど役廻りの悪い藝は外になし、

日本橋區の濱町一丁目、銀行の田口といへば五六町以外の辻待車夫に聞いても、すぐに知れる筈の邸宅、

さらに世間一般の通語としては、銀行員といふよりも、銀行家といはるゝほどの地位名望、また經濟界の衆目衆評には兼てより有數の手腕家を以て聞ゆる男、加之も年輩は分別盛りと働き盛りの今年四十三、平生は寧ろ圓轉滑脱の通人として、いまだ四方の交際上に敵を作りし事なき田口雄太郎その人が、今や十餘年來の憎からぬ我妻を去つてまでも、かの婦人俱樂部に猛烈なる一大砲火を浴せかけんとするの決心、もとより一朝一夕の生若い奴が前後の思慮なき一時の腹立紛れにあらず、これを我一身に取つては、よくくの堪へ難き事情あると共に、實は社會のため、天下夫婦

のため犠牲となりて深く大いに期するところあればこそ、

さもなくて亭主が嗅アを捨てらるゝものかとは、田口雄太郎が聲なき心の言葉なり、

はや其日の夜に入りて、午後七時過ぎ、主人の田口雄太郎が歸りしより凡そ三十分の後、細君ちか子、また外より俵を飛ばして歸り來れり、

いふまでもなく今宵は雙方に面白からぬ顔色、それを見て取る召使の男女は觸らぬ神に祟りなしと遠退いて、奥の一室に夫婦の差對ひ、されど娛しく嬉しく打ち解けし以前の差對ひにあらず、をりく額越の眼と眼に一種異様の閃きを包みし視線の衝突、そろく不祥の序幕は開きぬ、

「おい、ちか、貴様ア全體、今日、朝、出て今時分まで、どいどこに何をして居た」今朝、良人、お出がけに、さう申したちやアありませんか、丸の内へと、丸の内へ

も角の外でも勝手に行けつと、仰しやつたでせう」

「はゝア、さうだつたかね、もう公は忘れて居たが、いちく敵の言葉を記憶するやうな意味で、よく覚えてるね、勝手に行けといへば貴様、どこへでも勝手に行くんだな」

「だつて良人、現在、さう仰しやつたんですもの、それに實際、行かなければならぬ用事があつて、まゐつたんですから」

「ふん、そもく良人の知らない事で、その妻たるものが朝から夜まで家をあけて行かなければならぬ用事とは、どういふ大切な用事だ」

「ほゝゝ、今夜は良人、をかしく變に、妙に私を、お察めなさいます事ね、生涯の夫婦間に一日や半日ぐらゐ、よし良人の許可を得ない用事があつても、宜しいぢやありませんか、私を妻として信じて下さる以上、そのぐらゐの自由を與へて戴かな

くつては、妻も亦、一個の人間ですもの」

「何、妻も一個の人間だ、馬鹿、さういふ言葉はね、いかなる場合も自分の良人に向うて平氣に發し得らるべき筈のぢやないぞ、第一また人間でない畜生を好んで妻に持つ奴があるかい、生涯の夫婦間といふが貴様、生涯の夫婦といふことを知つてるか」

「おや、大變に御立腹です事、生涯の夫婦といふ事を存じて居ればこそ、一日や半日ぐらゐの自由は當然、與へられもし、また得らるゝものと信じて居りますの、つまり今日、私の行つたところに一種の悪感情を以て、御不審があるんでせうから、明白に申します、今日は丸の内内の婦人倶楽部へ、まゐりました」

「婦人倶楽部、ありやア何だ」

「あれは倶楽部の規則書の第一に示す如く、婦人天賦の權能を遺憾なく發揮し更に婦

人の神聖を保護すべきために起るといふところで御坐いますから、時勢に伴はれて多少自覚した今日の婦人は、是非とも行かねばならないところかと考へます」

「だまれ、こいつ、婦人天賦の権能も、婦人の神聖も、人の妻として家庭の外にあるかい、良人を離れ家を離れて貴様、どこに権能がある、どこに神聖がある、な、何だと、時勢に伴はれて多少の自覚した今日の婦人は是非とも行かねばならない」

「はい是非とも行かねばならないかと考へます、是非とも會員たらねば、ならないものと信じて居ります、たゞ妻といふ一字の名稱に閉ぢ籠められて女といふ全體の生命を没却されたり、抹殺されたりした昔とは違ひますから」

「おい、おい、かはいさうに貴様ア、もう既に以前の貴様ではない、あはれむべし一種の精神病者となつてゐるからね、外の事は説いて聞かしても分るまい、たゞ一言、最も分り易く答へ易く簡単に問うて見るが、あの婦人倶楽部と、この田口家と

いづれが大切だ、乃公の妻としてだよ、こゝへ嫁して来た貴様としてだよ、他人からぢやア無いよ」

「良人、今、この私を、何と仰しやいました、精神病者」

「む、精神病者、もはや精神に異常を來したものと見た、確に認めた、到底、今までの和女でない、實に、實に、不惑だ、嗚呼、いつの間に、さうなつたかねエ、由來これが第一の不幸と嘆じてゐた夫婦の間に子の出来なかつたのが今日、寧ろ却て第一の幸福であつたよ、もし子でもあれば田口雄太郎、さらに更に、これ以上の血の涙だ、これほど苦しい切ない事を、十餘年の今日まで連添うて来た乃公に、いはしても貴様ア、わつと聲をあげて泣きもせず、そゝそれ其、その顔色を變へて眼を据ゑて膝を詰めかけて来る工合、正しく精神に異状がある、たとひ、たとひ、いかなる名醫が非認しても、良人たる乃公は妻たる貴様に對して、なさけないが餘儀なく

立派に精神病者と認めるだけの議論を持つて居るから、さう思へ」
 「良人、いよく私を離婚なさるンです、さらに一點の過失も疚しいところも無い私を強ひて無理に離婚なさるンです、一時の暴力を以て叩き出すよりも猶更残酷に侮辱の極を盡した精神病者として、この私を生きながら殺すやうな毒悪の手段で離婚なさるンです」

「今こゝで乃公の言葉はね、今こゝで直に容易く出た言葉ぢやア無いぞ、あの婦人倶楽部の設立以來、その會員となつて以來、貴様に對して出来るだけの辛抱し抜いて考へ抜いた上の、已むを得ざる決心だ」

「それほど、そこまで考へて、その上の離婚とあれば私も良人に向うて今夜は此まゝ何事も申しません、しかし良人、私は婦人倶楽部の會員になつて居る事は御承知で御坐いませうね」

「無論、承知だ、それが第一の原因だ、その倶楽部の會員たるが故に去るんだ」

「婦人倶楽部の會員にして妻たるもの其良人より不條理の離婚を強ひられたる場合は倶楽部は全力を盡して之に當るべし、といふ條項も御承知の上でせうね」

「念に及ばない、全力でも権力でも勝手次第に盡して來い、あの倶楽部が實際、どこまで貴様を養つて導いて扶けて焔つて唆して力を添へて來るか、つまり貴様ア天下幾百萬の夫人に對して試験前の手習草紙になるんだ、乃公に去られても悔ゆるところは無からう、安心して出る、喜んで勇んで出て行け、これまで貴様の身に付いた物は無論、もし其他の財産が欲しけりやア田口雄太郎、男だ、きれいに半分くれてやるぞ、また世間に多くある例だ、わけて嫉妬深い僻み根性の寄合だ、もしこの田口を妻の外に於ける關係より其妻を去つたものとの疑念でもあれば、それこそ婦人倶楽部に最も勢力ある自慢の條項だ、妻のために門外の良人を秘密に調査し精細

に報告する機關を備へりといふ點で遠慮なく調べて見ろ、いゝか、乃公の貴様を精神病者として斷然こゝに離婚する所以は實に簡明だ、たゞその會員たるがためなり、つまり婦人俱樂部全體を敵に取つての意味だ、戦鬪は固より待ち受けて好むところだと、さういへ、絶えず男に手を引かれてさへ方角を取違へる出來損ひの脳味噌で屁理窟の塊固を上塗りした女どもが、わいゝゝ騒いで、べちやくゝ吐して、はゝゝゝどうする心算だ」

奥の一室に主人夫婦の形勢ますます急を告げて其極に達し、いよく最後の談判破裂となりしが、あとで笑うて済むべき尋常の夫婦喧嘩とは違ひ、いはゞ雙方より根本的主義を異にして避け難き意地と意地とを張り合ひし衝突の結果、もはや他より仲裁の餘地なきのみか、婦人俱樂部と男子俱樂部との開戦は既に世間一般の風評に上りし今日、これが先鋒たる田口家に召使はるゝ男女また各々その主人夫婦に味方して、玄關の

書生は何やら人知れぬ平生の復讐この時なりと澁皮の剥けし小間使ひに戦を挑み、臺所の下男は下女に向うて今更用のない總菜の盛り工合までを痲癩の種に持ち出す喧嘩口論、この例によりて波及するところ頗る廣し、

わけて田口家の邸内に一戸を與へられたる抱へ車夫の夫婦もの、世間普通の喧嘩は絶えず爲飽いて、皿小鉢の飛ぶぐらゐは珍らしからぬ今夜こそ、雙方より思ひ切つて馬鹿けたる大喧嘩を始め出しぬ、加之も亭主は眼も見えぬ泥酔の勢ひ、鼻アは負けず劣らずの不貞腐れ、

「さア、もう料簡がならねエぞ、いかな佛性の乃公も今夜といふ今夜こそ、堪忍の蟲も承知の種も無くなつて仕舞つたア、どこの誰が何と言つても聞くこつちやアねエ、さア畜生、出て行け、汝のやうな鼻ア持つて居ちやア旦那に濟まねエ、こらア旦那の家だぞ」

「旦那の家は知れてるよ、お前さんなんか九尺二間の長屋だつて満足に家賃を拂つて住める人かね、お前さんが旦那の肩を持ちやア私だつて奥様の肩を持つよ、へん、ふざけなさんな、夫婦といふものア同権だよ」

「や、こん畜生、圖に乗つて生意氣なことを吐すぞ、何、同権だア、同権でも唐犬でも構はねエ、乃公は亭主だ、昔から亭主は關白の位といふくれエなもんだ、今日も旦那のお供して男子俱樂部といふ男の中の一粒返、豪勢な寄合場所で陰ながら旦那の演説を聞いて來た乃公だ、うぬの同権ぐれエに凹垂れて堪るけエ、乃公ア良人だぞ、良人だぞ」

「良人、ほゝゝゝそれこそ落語家の言草ぢアないが、お前さんの良人は良人の下へ付ける言葉があるよ、おツと、どツこい」

「あゝ憐れむべし、あゝ悲しむべし」

「何だい、そりやア」

「よく聞け、早い談話が、かはいさうに御亭主の良人に向つて、さういふ事を吐す鼻アは必ず良人罰といふ罰が當つてね、とても末路は善くねエといふこつた、まさか他人でもなかつた阿魔が野倒死でもすりやア、あゝ憐れむべし悲しむべしぢやアねエか、前途を見越しての言葉だ、用心しろ」

「お世話さま、此方より其方が用心なさいよ、氣に入らない亭主を持って臺所の水瓶と同じやうに年が年中冷く扱はれて居るなア女の恥辱だとよ、わざ／＼何も恥辱を曝してさ、最初は他人の亭主を死ぬまで守るにも當らないから、さつさと相談づくで別れるのが當世、雙方お互のためで、それをね、お前さん、女子の本分といふ事よ」

「それを女子の本分といふ事よ、事よとは何だい、事よとは、乃公が旦那のお供して

出た留守中、ちよいく妙な具合で奥様に近づくと思やア、いつの間にか品位にもねエ變な言葉を覚えやアがツたな、さア、さういふ變な音を出して來ちやア猶更ら旦那に對して乃公の鼻アに据ゑて置けねエ」

「据ゑて置けない、御大層に何を仰しやいますだ、お前さんと夫婦になつて丸三年の今日まで、この私を鼻アらしく据ゑて置いた事がありますか、あけても暮れても張り飛ばしたり、蹴倒したりばかりしたぢやアないかね、よし今更ら据ゑられたツて誰が馬鹿々々しい、お前さんのやうな人に据ゑられて居るもんか、御催促に及ばず出て行きますよ、しかしこのまゝ私を出して、お前さん、それで濟むと思つてるの」

「濟むも濟まねエもあるもんか、亭主が御意に召さない鼻アを叩き出すんだ、ぐづぐづ吐しやア畜生、はッ挫いて横ツ面を擲り曲げるぞ、全體、うぬの面ア根性骨と同時に最初から妙に引ン曲ツてるから、不足でも三年の馴染甲斐だ、今こゝで叩き曲け

りやア、どうか斯うか真直になるだらう、さア、しやツ面ア出せ、かうなりやア、わざく手伸ばすも面倒だ」

「其方で手を伸ばすのが面倒なら此方で顔を差向けるなア猶更面倒だよ、それよりも第一お前さん、私を出す以上、外にも出さなきアならないものがあるだらう、おや、此人は、不思議さうに首を捻つて考へてるよ」

「乃公が勝手に考へてるんだ、うぬを叩き出す外に何、出すものがあるけエ」

「なくツてさ、あるよ、恍惚なさんな」

「なゝ何がある」

「着物さ」

「着物、着物なんか入るけエ、まッ裸體で、おん出ろ」

「入るよ、此まゝぢやアおん出られない、三年の間に、お前さんに買ツて貰ツた着物は

あるかね、一枚や二枚あつたにしろ、そりやお前さんの眼前で立派に着切つて仕舞
 ったよ、お前さんと夫婦になるまで私が奉公して拵へた着物は手も通さずさ、こゝ
 へ来たお庇で皆お前さんに流されて仕舞つたぢやアなぢやアないか、さア其、その
 流した着物を今、戻して貰はう」

「こゝ此奴、ふてエ事をいふぞ、ぶち込んで流したものが今更ら後へ戻るけエ、少し
 の雑物でもありアこそ、汝のやうな女に堪忍して連添つてやつたんだ、三年の年貢
 と思やア此方へ剩を貰ひてエくれエだ、づうくしさも大抵にしろ、身體に疵も付
 けず無事息災の丸裸で叩き出すなア、よほど御大量に在らせられるからだぞ、結局
 うぬの幸福だ、おとなしい結構な亭主を持つたと思つて厚く御禮を申し上げろ、よ
 く今まで罰が當らなんだ」

「お前さん、もう、それで、仕舞かね」

「何がよ」

「犬の遠吠え」

「犬の遠吠え、うぬ、亭主に向つて」

「亭主でないよ」

「亭主でないとすりやア、あかの他人様に向つて猶更ら畜生、承知が出来ねエぞ」

「そんな承知は出来ても出来なくつても、お前さんのこつた、私の着物を全體、どう
 してくれるの、お前さんも男の端なら出すやうにして出さない」

「出すやうにして出せエ、よし、注文通り出すやうにして出してやるから覺悟しろ、
 うぬア兎も角、實は只このまゝ出しちやア乃公の男が立たねエと思つてる折柄だ、
 三年の間うぬのやうな女の亭主にされた總勘定だ、これでも喰へッ」

平生より妻に向つて美味を供せざる奴が、さアこれを喰へと惜し氣もなく不意に差出

す時は、いづれ必ず持ち合せの鐵拳、加之も重ねて二個三個、きやツと叫ぶ女の聲は既に一家の平和を破壊せり、どたんばたんと俄に取組合の大騒動、奥には主人夫婦が十餘年ぶりの眼に角を立て、形勢不穩、車夫部屋には負けず劣らず掴み合の夫婦喧嘩、その中間には玄關と臺所に陣所を構へし書生と下女の紛亂葛藤、新參の小間使は既に手荷物を拵へて、いざといはど何時でも逃げ出す用意、田口一家の男女おのく、雙方に相別れて敵味方となれば、うろく、狼狽し洞が峠の權助おもはず裏口に歎じて曰く、

「おツかねエ世の中だ、おらア全體、どうすべい」

男子俱樂部と婦人俱樂部の對陣以來、社會あらゆる方面の男女おのく、これが動機となりて互に平生の不平を捻ぢ込みし堪忍袋の口を一時に開け放てば、さういふ筈でな

かつた事々物々の衝突、いたるところに起りて俄の睨み合となり膨れ合となり、雙方ともに遠慮會釋もない勝手な熱を吹き合ひしが、また一方これがために案外の僥倖を得しものあり、

いはゆる青年男女の堪へ難き戀に人生の利害一切を捧けて、只これ愛のために生き愛のために死せんとするもの、人知れぬ青葉がくれの公園に落ち合つて、緩く強く固く柔かに手を引き合ひながら、我を忘れし互の身を的なき方角に運びて、夢うつゝ一歩、蟻の這ふよりも遅し、

「よく出られましたね、」

「出られたンぢやなくツてよ、無理に出て來ましたの」

「さうでせう、家庭が家庭で、古い思想に囚はれた家庭に、新しい人は逆も自由を得られませんからねエ」

「よほど待ッて在らしッて」

「なアに二三時間です」

「あら、二三時間も」

「どうせ待つ以上、たとひ今日中こゝで空しく待ッて居ても僕は満足です、僕としては、いかなる場合も、いかなる間違ひがあつても到底、貴嬢を疑ふ事は出来ません、疑ふ餘地がありません、つまり僕は貴嬢のために生かされて居るんですから、今日の僕は貴嬢以外に生きて居ませんよ」

「まア」

「いや、眞實です、僕は貴嬢のために、どんな苦しい事でも忍びます、寧ろ喜んで愉快に忍びます、いかなる残忍の犠牲物に供せられても、さらに悔いません」

「そりやア私だッて、さうですワ、貴君よりも私の家庭が、大體あゝいふ頑固な舊思

想の家庭ですもの、どうせ、私の意志を障碍なく通してくれる筈がありませんわ、

きッと何等かの苦痛を忍ばなければならぬものと覺悟を極めて居ますの、わけて此頃のやうに男子倶楽部と婦人倶楽部の喧しい時でせう、だから猶更ね、ちよいと今日こゝに来るにしても、なかく警戒が嚴重ですの、ほんたうに困りましたワ」

「や、その倶楽部騒動に付いて貴嬢、どういふ思慮です、露骨にいへば僕に對する今日、現在の貴嬢としては」

「私、何とも感じませんわ」

「なぜ、どうして」

「どうしてッて私、あんな事を考へる氣には、なれませんもの、男子倶楽部が勝ッても負けても婦人倶楽部が勝ッても負けても、戀の神聖は、あくまで他に侵されざる戀の神聖だから、決して愛の神様は問題になさるまいと思ッてゐますワ、もし貴君が

なければ、私、進んで婦人倶楽部の會員になつたかも知れませんが、いやな事、もう誰が貴君、たとひ父兄に強ひられても社會に餘儀なくされても、私は私、もはや世の中の漠とした廣い意味の男に對する女でなくて、つまり貴君の私ですワ、ほ、ほ、でせう、さうぢやなくツて」

「感謝します、實に僕は、僕は實に今、貴嬢の、その一言で遺憾なき生涯の幸福を感じ謝します、僕も貴嬢のある以上、男子倶楽部と婦人倶楽部といふが如きものは、そもそも何のために起つたか、さらに其理由を見出すことが出来ない、ありやア戀も愛も實際に知らない不幸な男と女が寄り合つた喧嘩だ、この清く楽しい美はしき戀と愛とに成立つべき男女が、どうして其間に議論や理窟の生ずるもんですか、もし議論や理窟を挿むだけの餘地ありとすれば、その戀も愛も虚偽で、つまり眞實の満たざる證據ですよ、ねエ、は、は、は、あはれなもんですなア、彼等雙方の會員を聞

いて見ると、未婚の男女よりも既に夫婦となつた男女が多いといふんだから、夫婦たるべき以前、もしくは夫婦となつた當時は、まさか今日の如き冷やかなもんぢやアなかつたらうに、どうして、あゝいふ具合になるんだらう、殆ど僕なんかには解し得られない」

「ですがね、その夫婦たるべき以前、もしくは夫婦となつた當時も、やはり私等のやうに愛が満ちて居ないからですよ、つまり時代に後れた家庭の壓迫や親類の舊思想なんかに強ひられて、戀愛の意志を自由に行はれなかつたからですよ」

「なるほど、その最初が既に不自然だから、さうなるが當然の結果だ、して見ると猶更ら僕と貴嬢の間は、幸ひ今この不自然でない戀と愛とを遂げんがため、いかなる周囲の障碍も難關も破らなければならぬ、破れますか」

「あら、私より貴君こそ、破れて」

「破るとも、きつと破る、僕は男子だ、誓って踏み破ります」

「貴君に破れる事が、なぜ私に破れないの」

「破れないとは、いはないですよ」

「だって、貴君、今、私に破れるかと」

「なアに只、念を押したばかりさ」

「私、わざく、貴君に念を押されなければ、安心を興へる事が出来ないでせうか、

さう私、貴君に危まれてるの」

「こりやア困ツた、失敬々々」

「うかくすると、やはり貴君は男子倶楽部の會員になる方よ」

「や、怪しからん、僕に於て、そんな、僕は、決して、断じて」

「ほ、ほ、冗談です事よ、しかし私、さう思ツてるの、男は女よりも社會に許される

點が多いから、たとひ雙方に五分五分の理があツても、やはり女の方が言質を取られ易いでせう、だからね、貴君、かういふ時は、今でなくツてもさ、ほ、ほ、ねエ、お互に誓ツた言葉だけは、是非、お互に蓄音器へ吹ツ込んで置きたいの、さうすれば貴君、お互に言うた事が變らなくツて、をりく二人の枕元で、何よりも第一の證據になるかと思ひますワ、ほ、ほ、もし喧嘩でもした時、無縁の他人の仲裁なんか受けなくツても、その蓄音器が情交を直してくれれますよ」

「こりやア面白い、こいつア妙だ、いよく近き將來に、一日も早く、この戀愛を實行の場合は是非とも、お互に蓄音器へ吹ツ込まう、こいつア面白い、いかにも振ツてる」

「最初は私に對する貴君の愛の言葉で、その次は貴君に對する私の言葉で、虚偽のな心と心の眞實を順々に交るぐね、ほ、ほ、ほ」

「は、は、は、それを男子倶楽部と婦人倶楽部と雙方の幹事會へ持ち出して聴かしてやりたいもんだ、はッはッはッ」

この穉氣を帯びたる青年男女の戀愛は、神聖か不神聖か暫らく別論として、結局は一臺の蓄音器それさへ手に入るや入らずに治まりしが、こゝに治まらぬは蓄音器以上の癡走りし聲を絶えず發する花柳界、或る待合の奥二階、今日の新しき女より醜業婦として度外視さるゝ四五人の藝妓どもが、これも細君を婦人倶楽部に取りられて實は半自暴の馴染客を取圍み、盛んに身分相應の怪しい氣焰を吐きぬ、

「ねエ旦那、いくら馬鹿々々しい事が流行り出す世の中だッて、あんまり馬鹿け過ぎて呆れの宙返りぢアありませんか、開いた口が塞がらないどころか結んだ口も開けませんよ、大切な御自分の旦那様を粗略にして、何ですッて、婦人倶楽部、どうせ

妾達の這入れるところで無いにしろ、わざ／＼お頼み申して這入りたかアありませんわ、眞平だ」

「無論さね、苦しい工面で無理な無盡へ這入ッても、あんなもんへ誰が這入るかね」

「眞實よ、貴婦人とか令嬢とかいふ方ぢやア、妾達を女の部には見て居ないんだとさ、あゝいふものは全體どこの國で製造して來たんだらう、ぐらるに」

「ところが製造元は先様も我々も同じ鑄型だから、お氣の毒さねエ、ほゝゝゝ」

「どうだね、かうなりやア意地だから、めい／＼揃ッて男の方へ這入らうぢやアないか、男子倶楽部といふんだよ、そこで、御用に立たなくッても、さアいよく／＼喧嘩となれば負けないよ、女子の本分が、どうの、かうの、あッたもんかね、今日の婦人も昨日の婦人も一切お構ひなした、すぐに嚙り付いて、めちやく／＼に引ッ搔くのさ」

「ところがね、さうは巧く行かないよ、なぜツて、考へて御覽な、女學生から出た衛生美とか體格美とか、いつてね、男を相手に婦人俱樂部へ立籠るやうな奥様連中は、ウンと學校時代の體操で錬り込んだ身體だから、いづれも骨格が丈夫で肩幅が廣くツて力が強くて、山出しの飯炊女も跳足だ、うかく近寄ると捻ぢ殺されるよ」

「おやく、それぢやア考へもんだね」

「だからね、學問や力業では逆も叶はないよ、まさか端唄や三味線で勝てる敵でもなしさ、わるい相手だよ」

「ぢやア、どうすれば宜いだらう、口惜しいワねエ」

「イツそ此方も負けない氣で、藝者俱樂部といふモンを立て、威勢よく競争を始めようぢやないか、つまり相手の奥さん連が婦人俱樂部へ夢中になツてるのを幸ひ、その油斷を覘ツてさ、實は粗末に扱はれた不平滿々で面白くない旦那殿を、片ツ端か

ら引き出して面白く遊ばすのさ、ね、意地づくで今までより勉強はするが、無價で遊ばさないんだから自然と此方も繁昌するし、お客は同じお金で愉快が増すし、お互雙方の爲で、相手の奥さんだけが餘計な損をして入らざる腹を立てるといふ策略、どうだね」

「あら、まア、うまい事、この妓はね旦那、かういふ恐ろしい智慧がありながら、そら御存じでせう、あの例の情人にかゝると、まるで方なし、すぐ馬鹿になるンですよ、ほゝゝゝ」

「おふざけで、ないよ」

「冗談は儲置いて旦那、どう思召します」

「賛成々々、大賛成だ、やれ、大いに遣れ、ランと遣れ、創立費は乃公が引受けても宜い、乃公の朋友だけでも近來あの婦人俱樂部が癪に觸ツてる奴ア随分あるか

らね、それから其人と段々味方を募つて一番こゝは不埒な噂ア共の面當に夜も晝も遊びぬいてやるべし、働いて取り、取つて費ふ金は男の腕にありだ、何を糞、天下の女は噂アばかりだと思つて居やアがる、噂アは噂アらしく温順しけりやア分相應に守つてもやるが、とんでもない料簡違ひから生意氣に妙な眞似を仕出來しやアがツて、もはや旦那殿の御機嫌を損じた以上、尼になつて來ても許さないんだ、藝妓俱樂部、いかにも面白い、賛成々々、大賛成、もし株式なら乃公が第一の初筆で大株主になるぞ、しツかり遣れ」

男子俱樂部ばかり正面の敵とせる婦人俱樂部に取つて、おもはぬ不意の藝妓俱樂部は案外の厄介物、加之も世の中の裏面に油斷のならぬ潜勢力ありて、これを醜業婦とせるは社會の表面のみ、いよゝゝ事は内外表裏の複雑を重ねて種々さまざまの面倒を來せり、

其四

男子俱樂部と婦人俱樂部との對抗運動、ますゝゝ日を逐うて避け難き激烈を加へ、互に劣らぬ策戦計畫いよゝゝ騎虎の勢ひに進みし結果、衝突の運命まづ例の田口家に起り、家底に伏せられたる火藥は一時に爆發して、その音響と共に多年夫婦の情も愛も破壊さるゝや否、良人は男子俱樂部に立籠り妻は婦人俱樂部に驅け込み、待ち受けし雙方これを迎へて茲に戦鬪の序幕は開けたり、

いよゝゝ開戦と聞いて丸の内の婦人俱樂部へ馳せ集まりしは、重なる會員のみ凡そ七八十人、いづれも參謀將校ともいふべき女流を以て固く閉せる三階の會議室を満たしぬ、

いふまでもなく天下の男子を向ふに廻して一泡吹かしてやらんとする女の顔色に花恥づかしけの優しき筈なく、加之も其戦闘は今や將に開かれんとする一刹那の眼許に何の秋波も慥もあるべき。

親類縁者の諫言を耳にも入れず良人の愛に後髪も引かれず世間も家庭も振り捨て、馳せ集まりし女傑の一團、もの凄く怖ろしく、もし此うちへ男の五人や十人ぐらゐる飛び込めばとて忽ち踏み殺すべき勢ひ、氣の弱い奴は窓より覗いたばかりで其まゝ氣絶すべし、

男子倶楽部の急先鋒たる田口雄太郎に對して、婦人倶楽部の幹事長に選ばれ今や女軍開戦の參謀總長ともいふべきは、藤原秀子とて今年五十七歳の未亡人、

いはゆる新しき女としては世に後れたる案外の老女なれど、寧ろ敵とせる男子に一切の希望なき其年輩と其未亡人たるところに、却て今日の總將たるべき大膽の決心と一

身の歴史とを包めり、

二十年前に死せし良人は藤原周平とて其ころ有名の辯護士、家を譲るべき子はなけれど有り餘る遺産は殆ど三十萬と稱せられ、早くより社會の交際場裡に出でて男勝りの名を唄はれ、いやしくも婦人の會合するところ其姿の現はれざる事なく、わけて此婦人倶楽部の創立には第一に進んで三萬圓を寄附せしといふ勢ひ、年は次第に古く世に後れても、ますます氣は若く人に先んじて、その財産の餘裕、その年輩の經歷、その性格の結果、その境遇の自由、かゝる場合の御大將に最も適せしもの、この藤原秀子の外になし

年の若い口の悪い無遠慮の男、或る宴會の席上に婦人倶楽部を攻撃せし罵倒論の末、この藤原秀子を冷評して曰く、

「あの狂氣婆、あれでも人間の血と肉を以て男に對する女と生れた以上、生育發達の順序として處女時代があつたとすれば、その處女時代には人知れぬ小さい胸に誰か意中の面影を宿して、香に迷ふ春の花、露に照る秋の月、いづれ多少は優しい戀といふ事も知ツて居たに相違ない、また未亡人といへば生涯の獨身者でなく人の妻にもなツた筈で、うれしさの餘り恥づかしさを忘れて狂へる蝶の如く寄り添うた新婚の當時、どういふ氣で居たらう、どういふ態度だつたらう、それが見たかつたよ、また其後の幾年間を無事に連添うて來た自然の情愛、まさか敵の捕虜になつて苦しめられたとも思ふまいに、もはや寄る年波の男に用のない、否、用があつても到底その用の出來なくなつた今日、今更、その嬉しかつた男を相手に喧嘩の采配を振るとは、言語道斷、いはゞ昔の恩を仇で返すと一般、けしからん婆だ、このごろ流行の所謂群衆心理で、わい／＼騒ぐ若い女どもは現在と將來に何等かの要求するところ

ありと叫べど、なアに忌憚なく打明けた心體は、あくまで男を敵に取る意味でなく寧ろ男に用があり過ぎての間違ひだから、これを慰藉し鎮撫し説諭して、なるほど妾達が悪かつたと悔悟させ謝罪させる方法も手段も時機もあるが、奈何せん、人生いづれの點より考へても結局は女の廢物で、もはや男に要求すべき希望も絶え注文の資格も失ひ實行力も消滅した、あゝいふ糞婆の糞自棄に暴れ出した狂氣沙汰は殆ど手が附けられない、のみならず自分が男に對して心持の好い時はグーともスーとも吐さず黙ツて居て今日の若い女を煽動し教唆するとは、さんざ御馳走になつた後で不足をいふ因業婆だ、いよく開戦の曉は、和睦の後で直に我々男子の必要物たる若い女どもへは、なるべく手加減して傷つけざる程度に戦ふべしだが、その代り藤原の婆に向ツては猛烈なる一齊射撃、戰鬥力の集注を以て骨も残さず粉碎するの目的を達せねばならない、あゝいふ婆を自然の壽命に終るまで生かして置いては

世の中に戀も愛も情もなくなる道理だ、つまり我々男子を敵に取って人生平和の源泉たるべき戀と愛と情とを呪ひに出て来た悪魔だから、是非とも我々男子の手に打止めねばならない、どうせ惜しくもない死際の生命を持つた婆、うかくすると取遁すの恐れがある、進退これ谷ツた結果に自殺でもされちやア實に残念だ、願はくは遺憾なく我々の手にかけて上、寧ろ盛んに懲戒的の意味を含んだ大葬式を行ひ、その銅像を最も交通頻繁なる東京の中央に建て、前途將來、いやしくも男に對する不埒な女は悉く其前へ引摺つて来て、さア〜往來の諸君これを御覽なさい、この女を生んだ母親は此銅像で御坐い、といふやうな調子に侮辱の制裁を加へて一種の刑場にするんだ、出来る出来ないの議論は兎も角、實際このくらゐの勢ひを以て眞正面から容赦なく鼻ツ柱を捻ぢ上げねば、逆も今日の彼等に當るの効がない、もはや人道上の沙汰は無用だ、彼等は既に婦人でなく狂人である」

極端なる冷罵嘲笑は儲置き、眞面目なる社會の一部よりも殆ど人生家庭の破壊者たるが如くに視はれたる、この藤原秀子が婦人倶楽部の總將として、今や天下の男子を敵に引受けし戦闘開始の前一日、その參謀部とせる倶楽部樓上の會議室に現はれて、實に恐るべき大膽なる進撃態度の演説を試みぬ、

女は男に對しての女なれど、こゝに男を離れての女なるもの、既に兩性間に於ける一個の變化物なり、

まして藤原秀子の如きは生理上より最も婦人の心理上を支配すべき月經時期の消滅せる女、いはゆる女の餘儀なき弱點は既に悉く過ぎ去りて、もはや婦人的表情の必要なく婦人的態度の必要もなく、さらに生活の憂ひなく系累の煩ひなく、また世間に憚らず何物にも怖れざる身を以て、加之も自ら誇れる主義のために天下の男子を敵とせ

し勢ひ、凡そ世の中に物凄きものを老女の化粧とせし古人の生ぬるき眼より現在これを見れば、驚倒戦慄の極、逆も女の老いたる人とは思はざるべく、老女の姿を藉りし鬼神の業とや驚くべし、

されど流石に聲のみは女の古びたる聲、もし男子ならば前なるテーブルを音高く叩いて開口一番、諸君と絶叫すべきところを、静に押へて皆さんと叫びし點、また流石に五十餘年來の女性たりし自然の習慣範圍を脱し得ざるも、今や人生の渦中に投すべきダイナマイトに等しき爆發物を抱きながら、さらに心臓の鼓動さへなきが如くに落着いたる大膽の態度と、さらに恐怖の念なく満堂を見渡しながら老の面に淋しけの冷笑を浮べし決心の顔色とは、年若き女の幾百人が泣いて叫び狂うて騒ぎ廻る熱烈よりも猶更一種の恐るべき鬼氣を帯びて、ますく物凄し、

「皆さん、今お聴きの通り私の前の、この壇上に泣いて立たれました田口ちか子さん」

の演説、否、主義とか主張とかの演説でなく、現在の事實に於ける涙の告白を貴女が、いちく其お耳へ何と響きました、どういふ工合に御判断なさいました、決して貴女方のお耳に故障があるといふ失禮な意味でもなく、また貴女方の御判断力を疑ふ理由でもありませんが、事實が殆ど嘘のやうで、あまり事實にあるべからざる事實ですから、あらためて念のため重ねて二度、こゝに私が申し上げます、つまり責任を帯びた保證の地位に立って貴女方に訴へます、そも／＼人の妻として十餘年來、さらに一點の失策なく一事の疾しきところもない田口ちか子さんは、複雑なる家庭の餘儀なき事情にあらず、また其間に考慮を費すべきほどの理由あるにもあらず、至極簡單に明瞭で、たゞこの婦人倶楽部の會員たるがため其良人に去られて来たのです、加之も此婦人倶楽部の會員は即ち悉く精神病者であるといふ一言の下に去られて来たのであります、ところで其良人は全體、何物かといへば、近來この

我婦人俱樂部を敵として粉碎せざれば已まざるの目的に起つた男子俱樂部の幹事長田口雄太郎といふ人です、つまり人類の自然に應じ社會の大勢に隨ひ個々の自覺と自信とを以て精神的に組織せられたる此俱樂部を糊細工か竹細工の如くに叩き潰さうとする人、我々婦人の天賦に與へられたる權能と神聖とを蟲か草の如く泥靴に蹂躪せんとする人、所謂男子俱樂部の參謀總長たる田口雄太郎その人でありとすれば、單に只これ自分の妻を去つたのみの意味ではありませんまい、いかに殘忍でも、いかに冷酷でも、いかに無情の極でも、いかに横暴の極でも、白癡瘋癲にあらざるかぎり十餘年來の妻を一朝こゝに去るとしては、あまりに思ひ切つて去るべき道理がなさ過ぎます、あまりに平氣で、あまりに容易で、あまりに大膽に行ひ得て、去るべき理由の所在を没却し過ぎて居ります、我々婦人に對する侮辱は別として彼自身一個の立場より見るも利害より算するも、あまりに今日の社會を無視し人道を破壊す

るの罪に甘んじ過ぎて居るではありませんか、いふまでもなく皆さん、もはや時が來ました、もはや勢ひ餘儀なく起つ時が來ました、いよくお覺悟なさい、これは自分の妻を去つたよりも寧ろ自分の妻を犠牲に供して、いはゆる戦争の血祭りにして、我この婦人俱樂部へ戦ひを挑みに來た急先鋒と見るより外に、どう考へても考へる餘地はありません、さア皆さん、始まりましたぞ、さア皆さん、始まりましたぞ」

藤原秀子の老顔に一種異様の活氣を呈し來りて、その寂びたる聲いよく高く、その光れる眼ますます輝き、半以上に白くなれる髮の毛を二すぢ三すぢ薄黒き老の額に振り亂して、肉は落ちたれど老齡にも似合はず胸を張りて脊髓骨の直立せる態度、枯木の如くなれど兩手に空を斬つて何物をか兩斷せるに等しき勢ひ、

「如何です皆さん、人間に最も大切なる慎重の態度と前後の思慮とは今日までの事

で、もはや改めて考へる餘地も餘裕もなく、また改めて御相談する時日も必要もありません、たゞ我々が生命とせる婦人倶楽部の三項目だけを讀み上げます、しかし今こゝで貴女方の前に讀み上げますのは一個の藤原秀子が倶楽部の規則書を只その文字通りに讀む意味ではありません、つまり我々婦人の幸福を目的として精神的に組織せられたる結晶體が、あるものに觸れて發する自然の音響で御坐いますから、皆さん其お覺悟で願ひます、まづ第一に（婦人倶楽部は婦人天賦の權能を遺憾なく發揮し更に婦人の神聖を保護すべきために起る）また（婦人倶楽部は婦人として男子より侮辱を蒙りし場合の最も堅固なる城壁たると共に最も嚴格なる意味を以て其侮辱に對する手段を取るに躊躇せざるべし）また（婦人倶楽部の會員にして妻たるもの其良人より不條理の離婚を強ひられたる場合は倶楽部の全力を盡して之に當るべし）以上この三項目は今日までのところ、つまり倶楽部の目的と理想とを正當な

る要求と順序ある希望の上に示したのみで、實は我々これを以て直に天下の男子を敵とする開戦の準備でなく、たゞ時代の必要に應じた警告の意味に用ひて來ましたが、もはや其目的を文字以外の駈足に實行すべき時が迫りました、もはや其理想に止めずして現在の事實に現はさねばならぬ場合となりました、いかなる手段を取つても、いかなる艱難に出逢つても、この倶楽部を婦人神聖の城壁とし、この倶楽部を婦人名譽の死地とし、この倶楽部の全力を盡して當るべしといふ約束の下へ、まア何といふ大膽なる人道破却の悪魔でせう、この我々を一呑みの勢ひで既に近く這ひ寄つて來ましたぞ、もし萬一、この際この三項目が我々の世を欺いた空文徒辭となれば、たゞこゝに會合せる我々が其悪魔の餌食となつただけでは濟みません、また會員の一人として、現在の堪へ難き侮辱を受けて來た田口ちか子さんを犬死さすだけでは濟みません、そもく婦人は男子の玩弄物たりし古來の蠻風を破らんとし

て、それがため起つた此俱樂部なるが故に猶更の恥辱、寧ろ却て破り得ざりし失敗の歴史を永久に傳へ、とても力に及ばずして征服せられたる降参の證據を子々孫々に残さねばなりません、もし不幸にして事ここに至れば皆さん、どうなさいます、いはゆる腹背に敵をうけた道理で、前よりは天下の横暴なる男子に笑はれて、ますますその冷遇虐待を蒙ると共に後よりは天下同性の婦人に怨まれて、いよく我々の申譯が立たなくなりませう、いづれにしても我々の俱樂部は今日の場合、到底このまゝに平和の解決を得られない運命を持つて居ります、もはや既に平和の解決を得られないものとすれば、寧ろ進んで平和以外に得らるべき手段を取らねばなりません、とところで今こゝに平和以外の手段とは、何で御坐いませう、世間の通語かゝる時の餘儀なき行爲を稱して、非常手段と申します」

藤原秀子が白髪のお顔に冷やかなる微笑を浮べて、叫び出せし非常手段の一語は、満

堂の女流をして思はず顔と顔とを見合はさしめ、さらに見合はせし視線を再び我一人に集めて、正面の演壇をテーブルに離れて二歩三步、サツと前に進み出でぬ、

「これは我國の事では御坐いません、遠く海外の英國にあつた近き實例で、また我國體に生れた我々婦人としては、いかに熱狂の高潮に達しても、いかに時勢の變遷に遭遇しても、夢さらく決して望むべきものでなく學ぶべき事ではありませんが、彼國の婦人が所謂參政運動、否、寧ろ運動といふよりも參政權を得るがために恐るべき大陰謀を企てた、その勇氣と、その決心と、その大膽にして用意周到なる行爲とは、非常手段の解釋上に最も適切なる極度の實例を示して居ります、つまり平生は露さへ重げに見ゆる花のやうな、かよわき女も、一たび意を決して事に當れば世界を驚倒せしめ戦慄せしむるに足るといふ證據を擧げるのみで御坐いますが、彼等婦人が言論の自由と出版の自由を以て全地球上に誇れる大英國に生れながら、その

機關新聞の發行を永久に禁止され、いたるところ其演説を容赦なく差止められて逮捕され、また彼等の主義を賛成して金品を寄附するものも直に法律の犯罪者とせられ、其他いろいろの壓迫を加へられた結果、さらに幹部の有力なる婦人が悉く收監せられた結果、もはや外に取るべき手段なしとして、いよいよこゝに最後の決心は實に身の毛も彌立つほどの大陰謀となりました、その大陰謀は警視廳の嚴密なる搜索隊によりて殆ど晝夜を分たぬ苦心慘澹の末、ある家の奥深き地下室から發き出されましたが、その地下室には強烈なる火薬と鋭利なる武器と精巧なる器械の外に最も緻密なる具體的の決行書類が現はれたさうです、その祕密書類には重なる官衙公館工場を悉く焼き拂ひ倫敦市中の樞要なる道路橋梁を破壊して地上地下の交通を全滅せしめ、さらに裁判官と警官に再び起つ事の出来ない一大打撃を加ふべき方法と手段と時日と手配りを實に遺憾なく遺漏なく細密に明記してあつたさうです、

その一例を挙げれば、電話本局の北方に面せる硝子窓は常に開放しあるがため往來より爆裂火薬を投げ込むに最も容易く便利なりとか、またホワイトホールの主計局は出入の監督嚴重なれど年金の支拂を要求するといへば自由に入場を許さるべしとか、或は戸籍徵稅印紙事務を總括せるソマーセットハウスを焼き拂ふにはストランド街とウエリンド街の方面よりパラピン油かベンゾリン油を注げる燃料物を投ずべしとか、また道路橋梁の破壊には修繕の途まで絶つるの目的を以て其材料の置場と倉庫を一時の灰燼に歸せしめんとせしが如き、その他いづれも小説家の空想かと思はるゝ此大膽なる此大陰謀を、いちよく悉く實際に行ひ得らるべき手段と方法を以て緻密に具體的に説明し記載してあつたには、流石の政府當局者も舌を捲いて驚いたさうです、加之も彼等婦人が監獄に投ぜられし後は所謂ハンガーストライキで斷食同盟を決行して、いかなる美味を供せられても強ひられても水の外は一片のパン

さへ口にせず、たゞ其口を開いて、我等は主義のために死センのみと、叫んで居るさうです、そこで係り官は無理に押へて鼻の穴から滋養分を注射するといふ騒ぎ、いかゞです皆さん、英國に於ける彼等婦人の恐ろしい狂態は夢にも我國の婦人として學ぶべき事ではありませんが、その死を顧みざる勇氣と事に處する決心とは、これを正當に行はんとする我々のため實に一種の興奮劑かと考へます、英國の彼等婦人は參政權を興へよといふ下に其英國の安寧秩序を亂さんとする犯罪者で、今日は殆ど社會全體より見捨てられて狂人の取扱ひを受けて居るさうですが、我々の希望と目的は一點さらに國家に對する危険思想でもなく、社會に對する破壊主義でなく、たゞ男子に對する婦人天賦の權能を發揮し神聖を保たんがため、みづから招かざれど勢ひ餘儀なく事こゝに至つたとすれば、その餘儀なき勢ひに驅られて取るべき手段に何の顧慮すべき點がありません、何の躊躇し逡巡すべきところがありません、

世界第一の文明を以て誇れる倫敦全市を一時の闇黒に葬り去らんとした怖るべき大陰謀でさへ、もし實際これを行へば實際これを行ひ得べき用意周到と細心緻密の手法手段が婦人の頭腦より案出された以上、まして今こゝに我々が人類の自然に應じた希望を達し目的を遂ぐべき方法手段の實行されない筈はありますまい、貴女方の覺悟たゞ一事で容易に出來ます、貴女方の決心たゞ一事で必ず立派に行ひ得られます、かよわき女の案外に驚くべき力ある事を、たゞ最近に於ける海外の實例ばかりにとつては、貴女方の自信力に多少の疑ひを起さしめて、動もすれば弱味を感じしむる恐れがありますから、我國の婦人中で、かゝる場合に最も適用すべき意志の鞏固なる女丈夫を一人、こゝに御紹介いたしませう、それは外でも御坐いません、皆さん御承知の通り元龜天正の時代に一世の英傑として鳴り響いた織田信長、其頃の實話を上せた書本を見れば、人を地に這ふ蟲とも思はざりし古今猛將の織田信長が、向

ふところ敵なき勢ひを以て四海の群雄を征服いたしました。たゞ攝州石山の本願寺に向うては前後十餘年の間、どうしてもが勝つ事が出来ません、いくら戦つても戦ふ毎に兵を損じ敗を取るばかりで流石の英雄も殆ど持て餘した結果、竟に勅使を乞うて和睦したとありますが、信長ほどの英傑が何故、どういふ理由で門徒坊さんの本願寺と戦うて前後十餘年も苦しめられたかといへば、其間に恐ろしい一人の女が介在して居ったからです、加之も其女は七十に近い皺くちやの腰も足も曲ったお婆アさんで御坐いました、此お婆アさんは妙光禪尼といふ一向宗の信者で、かの有名な森三左衛門可成の妻、六男四女を生んで、森傳兵衛可隆、鬼武藏と稱せられた森武藏守長可、本能寺の働きで名高い森蘭丸長定、森坊丸長隆、森力丸長氏、此等を子に持つて其他の一家一門また悉く信長の腹心となり股肱となりしものばかりですから、この忠臣の妻とし、この豪傑の母とし、信長の奥深く仕へて日夜内外

の耳目さらに毫末も疑はれざる女丈夫が、その良人は固より我子の兄弟にも我身の一門にも知らさずして、佛法守護の大念力より岩間の苔清水が漏れ出づる如くに、信長の動くところ信長の謀るところ、一擧手、一投足、いち／＼絶えず竊に敵の本願寺へ通じたからで御坐います、つまり信長の最も苦しんだ強敵は本願寺よりも却て信長その身の左右に音なく潜んで居て鬼神も知る事の出来なかつたがためで、本願寺また妙光禪尼の末子仙丸を養うて門主とするの密約あつたさうですが、一門兄弟これを知らずに悉く信長の恩に斃れ義に死して血統が絶えましたから、残つた仙丸が家を嗣いで森美作守忠政となりました、ところで本願寺は妙光禪尼の苦心慘澹たりし守護を長く忘るべからざる功德として、今に至るまで森家の紋を表はし鶴の丸と抱牡丹とを用ひて居ります、古來我國の史上に唄はるゝ烈女なるものは多く白刃の上の烈女で、加之も犠牲的の貞節論から割出されて、つまり男に對す

る女の服従を明かにし、良人に對する妻の最後を、死といふものに歸着して居るやうですが、この妙光禪尼の如きは最も遺憾なく婦人の底強い忍耐力と婦人の底固い信仰力とを現はして居ります、戦國武士の妻としては音に聞えた勇將を良人に持ち、また揃ひも揃って誇るに足るべき兄弟を子に持ち、一代の英傑に從うて内外の譽を一身に集め、いはゞ當時の冥加に餘つた本望の極に達しながら、我信念のためには以上の冥加も本望も只これ眼前の塵埃で、その信念を鬼神も窺ひ得ざる大祕密に包んだまゝ老の腰を信長の左右に屈めて、眠るが如くに靜なる間より前後十餘年間、驚天動地の矢玉を浴びた本願寺を人知れず守護したといふ點に至つては、寧ろ男子の英雄も豪傑も及ばざるところに却て婦人の血と肉に包含せられて居る證據ではありませんか、たゞ信長本位の忠義論では、不忠者になります、妙光禪尼としての信仰上からいへば、主義のために何物も我心を奪ひ得ざる不言實行、一人の信長に

對するよりも更に廣く大なる節義を難關中の難關に首尾よく爲遂げた古今獨歩の女傑で御坐います、最後を一死に託して哀れを長く後の世に稱せらるゝ貞女烈婦とは違ひ、戦國の當時かゝる大祕密に隠れてゐた女傑が我々祖先中にありといふ事を皆さん、どうか過去に於ける一場の歴史談とせずして、その情實に囚はれざる忍耐力と、その何物にも奪はれざる信念力と、その大膽不敵にして不言不語の間に永續せる決行力とを今日この俱樂部の精神とすれば、戦國武士の雜兵だにも及ばざる臆病未練な今日の男子に向うて、我々の希望と目的を達する事は、何でもありません、また信長ほどの恐ろしい猛將が貴女方の家庭に眼を光らして我々を睨んで居りますか、まして一個の本願寺を守るよりも偉大なる人道の自然に従ひ婦人の神聖を保つべき公明正大の戦ひです、加之も妙光禪尼が前後十餘年間の苦心慘澹とは違うて、こゝ一年か二年の間、長くて三年か五年、許されたる自由行動の下に備はれる機關

の下に活躍する我々が、断じて行へば如何なる事も成らざる理由はありますまい、もし萬一これが出来ないとすれば、出来し得ない我々の薄志弱行で、寧ろ今のうちに此婦人倶楽部を解散する方が却て我々の利益で、せめて自己を知るの明を得られます、しかし戦はざる前に白旗を樹て、降参すれば我々こゝに男子の捕虜となつて侮辱の極に扱はれ、今までの玩弄物以上に猶更悲惨なる運命を覺悟しなければなりません、如何です皆さん、今日この倶楽部を解散して門前に白旗を掲げませうか、今日の倶楽部を我々婦人の堅固なる城壁として、あくまで戦ひませうか」

満堂の女流、おもはず我を忘れて動搖めけば、藤原秀子ますます寂びたる聲を張り上げて、いかにも大膽なる最後の斷案、

「恐れ多くも皆さん、この豊原瑞穂國を照らし給ひし天照大神は、建國の歴史上、男子では御坐いませんぞ、やまと民族の盡きざるかぎり世の中の闇を照らすものは

我々婦人の天職として傳へられて居りますぞ」

藤原秀子の口より吐かれたる此一言によれば、今日この一堂に集まれる女流は、いづれも皆これ八百萬の女神達なり、

女神が勝つか、男神が勝つか、こゝ暫らくの間は雙方より互に人間放れの勢ひを以て作戦計畫の眞最中、とても家庭どころの騒ぎでなし、

藤原秀子の演説は其まゝ直に開戦の決定となりて、其日の夜に入りし後、幹部中の幹部ともいふべき十一人の婦人、また再び秀子を中心として奥深き一室に閉ぢ籠り、いよく敵に對する大體の方針より細目の手段に至るまで秘密の會議を開きぬ、されど秘密は敵に對するのみならず味方に對しても或る程度と或る時日まで秘密を保つべき必要ありて、いまだ容易に秘密の蓋を開けざる前、まづ第一世間の耳目を驚か

せしは、婦人倶楽部の全會員に發せる開戦の動員令とも稱すべきもの、これを印刷する器械も職工も一切すべて門外男子の手を借らず、いつしか人知れぬ俱樂部の内容に遺憾なく設備されたる用意周到は、ます／＼猶更世間の耳目を歛て、其他にも意外の何物を祕密室に貯藏せるかと、恐ろしき英國婦人の參政陰謀を聯想せしめぬ、

その動員令に等しき印刷物は、六個條を以て成れり、

急 檄

- 一、從來の婦人倶楽部は或る意味と或る程度とに於て消極的の態度を取りしが今後の婦人倶楽部は如何なる場合も進んで大いに積極的の態度を取るべし、
- 一、從來の婦人倶楽部は社會の慣例と家族の風習とを、及ぶかぎりの自制力に容認せしが、今後の婦人倶楽部は主義のために何物をも敵とするの行爲に躊躇せざ

るべし、

- 一、從來の婦人倶楽部は其記名と其會費を以て會員の數に加へ來りしが、今後の婦人倶楽部は會費を二倍として幹部十人以上の決議は事情の如何に關せず會員の名簿より削除すべし、

- 一、婦人倶楽部の會員にして俱樂部の招集を受けし場合は、人間の不可抗力以外、その招集に應ずべき義務を有すべし、

- 一、婦人倶楽部の會員にして、演説もしくは新聞雜誌その他の著作物に自己の意見を開陳せんとするものは一應まづ其原稿を示すべし、但し言論出版の自由を拘束するの意味にあらず寧ろ言論出版の自由を奨勵し贊助するの敬意歡迎を以て批評訂正すると共に、俱樂部また別に相應の原稿料を支拂ふべし、

- 一、婦人倶楽部の會員にして俱樂部の信條とせる主義のために生じたる不幸は、社

會上に關せず家庭上に關せず一切これを俱樂部の責任として、其會員に對する救濟保護に全力を注ぐべし、警ひ過つて法律上の犯罪者たるとも犯罪の意味に於て俱樂部の是認するものは出來得るかぎりの力を盡して及ぶかぎりの援助を與ふべし、

この檄文は婦人俱樂部の會員のみに止まらず、突如として不意に暴風砂塵の舞ひ込めるが如く、満都の家庭に配布されぬ、

流石に表面は婉曲なる文字を以て其鋒銛を包めど、文字の外に含める意味は明白に天下の男子を敵として殆ど決闘狀に等しき勢ひ、わけて中に最も薄氣味わるく臆病者の腸を寒からしめし點は、時と處に關せず俱樂部の招集を受けし會員は人間の不可抗力以外いかなる難關を排しても其招集令と共に馳せ來るべしとの一條、また最後の一條に警ひ過つて法律の罪人たりとも俱樂部これを是認すべしとの意を漏らせし點は、

「いまだ火藥の爆發を見ざれど既に導火線の火は點ぜられたるが如し、危険、危険、大危険、」

其五

月賦仕立の古洋服を身に纏うて絶えず時間の制限に追ひ立てられ追ひ廻され、最も多き勤務に最も妙き報酬を得るもの、いはゆる薄給の刀筆吏、世間これを一面に憐れみ一面に嘲り、冷笑的敬語を呈して腰辨先生といふ、

實際その腰に晝飯の辨當を下げざれど、これを洋服の小脇に抱へ込んで餘儀なき營養不十分の顔色憔悴、割引電車の冒険客となりて雨にも風にも日々の出勤、寧ろ職務の神聖は肥馬輕車の大官よりも此腰辨先生にあり、

さらに腰辨先生の悲惨なる、役所に出でては局長課長の眼鏡越に睨まれて寒からぬ夏

の日も縮み上り、家に歸りては絶えず米屋薪屋味噌醬油の責苦に逢ひ、うかくすれば糧道を斷たるゝ恐れあるのみか、せめて人生こればかりは我自由になるべき筈の細君まで、もし不運にして當世ハイカラの跳ね返りし議論女史でも持てば、實に内憂外患の極度、生涯の浮ぶ瀬なし、

あはれむべし、あはれむべし、以上の條件を悉く備へて、遺憾なき代表者と生れたる腰辨先生、年輩は三十五六、青白く瘦せたる顔に薄赤き八字髭を生して、平生よりは猶更活氣なき猫脊に差俯きながら、悄然と歸り來りしは八圓の借家住居、もはや修繕期の迫りし古靴を脱ぐにも力なく、これが第一の大座敷六疊の一室に入りて、我身を抛げ出すが如く一閑張の机に獅噛み付くや否、兩手に頭を抱きしまゝ溜息吐息、

「あゝ仕方がなし」

無縁の他人でさへ、その境遇を知り、その人物を知り、今また平生にない此うち沈み

たる體を見れば、事情を問はずして自然に同情の念は起るべき筈を、連れ添うて四年以來の細君、さのみ眉も顰めず氣にもかけず、實は聊か澁皮の剥けし二十六の白粉面を間違うて塵埃溜に降りた鶴と心得、多少の學校履歴を鼻にブラ下げて腰辨の妻たる不平満々、石鹼と洗ひ粉と糠袋とを手拭に包みて、

机に伏して兩手に顔を押しし良人、そのまゝ身も動かさずに絞り出せし苦しげの聲、

「湯どころぢやアない、今日は止せ」

聲と共に飴細工の如く、ぶツと膨れ出しぬ、

「湯に行くのが何故、悪いんです」

良人は無言、

「良人、なぜ湯に行けないんです、一日だって湯に入らずに居れますかね、朝は世間普通より早く出勤の間に合して御飯を炊いたり拭き掃除をしたり留守中は留守中の

用で張り物や洗濯の片手に米屋の謝りも薪屋の催促もありますよ、せめて良人の歸つた時に湯に入るぐらゐの慰安がなくては逆も堪りません、不幸なる私の運命に取つて愉快の極點は流しとも一度で四錢の入浴あるのみです、別に海水浴に行きたいとも温泉に行きたいとも申しませんからね」

「さう喧しく言ッてくれるな、今日は頭が痛いんだから」

「喧しくいふのではありませんが、いはなければ分らない相當の理由を陳べて居るんです、もし頭腦が痛ければ良人お寝みなさいな、さう机に嚙り付いて居たツて癒りませんからね、今日に限らず大體、良人の頭腦は、よほど養生しなければ、いけな

いでせう」

意味の取り様に依りては、馬鹿といはぬばかりの言葉、さらぬも妻として良人に向ひいち／＼言語道斷の始末なれど、大喝一聲これを叱り飛ばすほどの良人でなく、まし

て今日は猶更ら振返るだけの氣力もなし、

「ぢやア湯に行けよ、乃公は寝たい時、勝手に寝るから構はずに行くが宜い」

行くなといへば無理にも行きたく、行けといへば急に行かぬ女、ぢやアの一語が忽ち御意に觸れたり、

「さう良人、いやなら強ひて行きたくはありませんよ、ぢやア行けツて、心持よく行かれますかね、もう、私、今日は行きません、斷じて行きません、わざ／＼殊更ら良人の意志に反いてまで湯に入りたくは御坐いません、貞淑に差控へます、なるほど月に一圓二十錢の湯錢は三十五圓の月給に對して二十九分の一強に當りますからね、いかに身分不相應の贅澤です、しかし考へて見ると實に不幸です、私の不幸ばかりでなく良人も實に不幸な境遇ですよ、わづか白銅一枚で餘るべき身體の清潔法が夫婦間に於て、これほどの言葉を費さなければならぬ運命に囚はれて居

るンですから、あゝ、嫌な事、人生は何故、かう意の如くならないンでせう、俗語
ですが、まゝならぬ浮世とは、盡し得て居ますね」

木像の如く机に打伏せし良人の顔、やうく放れて振り返ると見れば、ますく血色
を失ひ、光りなき眼の光りしは男泣きの涙、びくくくと上唇を顫はしながら、容易
に言葉も發し得ず、なほ暫し其まゝの無言に妻の顔を打守りしが、堪へ難き總身の大
息ほつと音するばかりに吐いて、

「無効だ、いよく無効だった」

「何が無効でしたの」

「何がツて、いよく首になつたよ」

「えッ、免職ですか」

「今度の行政整理でね、まさか乃公のやうな小さいものは、國家の大利益にも關しな

いから、寧ろ却つて助かるだらうと思つて居たが、やはり無効だ、やられて仕舞つ
た、これまで別に眼立ツた働きもないが、いまだ曾て一日も缺勤した事はなし、
技倆はなくても正直一途の勤勉で執務上に失策はなし、年輩からいへば老朽でもな
し、どう考へても實は諦めが付かんよ、せめて三分の一を貰へる年限にでも達して
居ればだが、それも無効だし、全く木から落ちた猿だ、今更ら仕方もないが、初歩を
過つたよ、孫子の代まで月給取なにかにするンもぢやアない、小賣商人でもなつて
置けば、よもや今日、かういふ目には逢はないだらうにねエ、汝にも氣の毒だ」
無事に勤めて居ても僅に三十五圓、たとひ異数の例外に進んでも行止りの知れたる人
間、その三十五圓にさへ見放されたる良人と思へば、夜なく虚榮を夢みる此妻とし
て、まづ第一の心に浮びしは何事ぞ、
肉體の血色のみならず今は殆ど精神的の死人に等しき良人を、悲慘の極として泣くよ

りは寧ろ無能の極と見て冷かに笑ふべき妻の冷酷、前途將來は儲置き、眼前その身の途方に暮れし良人を、あくまで勵まし慰めて助くるよりは寧ろ一日も早く我身の處置を決すべき妻の無情、

「しかし良人、いよ／＼さうなツた以上、いくら愚癡を滾しても後の祭り、もはや仕様がありませんよ、ところで良人、今後どうなさる覺悟です、どういふ目的です」

「さア別段、どういふ考へも、まだ付かないよ」

「考へが付かないでは困りますね、付かなくツても何とか考へねば、ならないでせう、無資産の人間が一朝その職を失ツて収入の途が絶えたんですもの、うか／＼此ま、一日も良人、じつとして居られますか」

「だって今、さう急に走り歩いても、探せないぢやアないか」

「知れたこツてすよ、職に放れたを幸ひ待ち受けて争ひ迎へらるゝ良人でもなし、また實際、さういふ良人なら首になる筈もなし、どうせ哀訴歎願的の餬口を、いづれかへ取継るより外に方法も手段もありませんが、その以前に於て、つまり現在です、ね、まづ良人の決心だけは、どういふ目的か、極めて置く必要がありません、全體どうなさるんです」

いよ／＼敵を追窮するが如くに問ひ詰められて、ますます度を失ひし良人の無言、わけて此際この妻の眼には、その無能に呆れて愛想の盡きし顔色、

「自分の一身を自分で處せないとは、あまり良人、一個の男子として、なさけないぢやアありませんか、女だツて、進退こゝに谷れば一方の活路を開きますよ」

あはれなる良人は再び兩手に頭を抱いて、また再び一閑張の机に獅嚙み付けば、おもはず妻の口より漏れ出でし舌鼓、

折も折から無慙なる運命を重ねて、この時こゝに舞ひ込み來りしは、例の婦人俱樂部より發せし印刷物、

男子より侮辱を蒙りて壓迫せられし婦人でなく、寧ろ却つて婦人より石臼を載せたる如く男子を壓迫せし夫婦の間なれど、此際に於ける此良人に對して、此際に於ける此妻のためには此印刷物に活躍せる刺激文字の言々句々、いかに手綱を切りし心の駒を鞭しぞ、もはや既を脱して狂ひ出せし奔馬なり、

「良人、ちよいと良人、これを御覽なさい」

肩に手をかけられて、餘儀なく振り返れば、その鼻頭へ白刃の如く差出しぬ、

「世の中も段々進歩して來て、かういふ時勢の要求に促された産物が現はれるんですね、實は今まで良人には祕して居ましたが、この婦人俱樂部が設立の當時、既に會員となつて居たんですよ、つまり婦人天職の權能を發揮し更に婦人の神聖を遺憾な

く保護すべしといふ主義が、どうしても加入せずに居られませんからねエ、ところで今日この檄文を見れば何等かの必要上いよく積極的に押出して、從來の婦人俱樂部は社會の慣例と家族の風習を及ぶかぎりの自制力に容認せしが今後の婦人俱樂部は主義のために何物をも敵とするの行爲に躊躇せざるべしと、まア何といふ愉快な事でせう、かうならなければ、いつも女は男の隸屬物で使用物で、貧乏すれば貧乏の道伴、難儀すれば難儀の御隨伴ばかり仰せ付かつて、少しも自分の利益と自分の意志に應じた自由行動が取れませんからねエ」

いかに度を失うて喪心せる如き良人も、いかに生れついて好人物の良人も、この一言は耳に聞き咎め腹に据ゑ兼ねて、ぐいと膝を向け直しぬ、

「妙な事をいふね、貧乏すれば貧乏の道伴、難儀すれば難儀の御隨伴ばかりで、少しも自分の自由行動が取れないとは、汝、この乃公に對して何か、急に特殊の考へが

あつて、いふんだらう、全體、どういふ自由行動が取りたいんだ」

この妻君が何として其まゝに黙るべきか、寧ろ幸ひに迎へて得たりの勢ひ、

「おや、良人こそ妙な事を、私は決して妙な事はいひませんよ、わざわざ何も急に特殊の考へがあつて、いふ理由やぢアありませんよ」

「しかし汝、現に今、自由行動を取りたいと、いうたぢやアないか」

「そりやア良人、私に限らず誰だつて自分の意志を枉げる事は嫌で、自由行動は取りたいもんですよ、人間また自由行動を取るべき場合に取れないとすれば、どこに生命があります、生きて居る甲斐が更にありますからね、罪を犯した監獄の囚人は兎も角、さもない以上、人として束縛せらるゝ理由はありますまい、現に良人は行政整理の結果、もはや入らない無用の人物といふ點から職を免ぜられてさへ、不公平があるぢやアありませんか」

「どうせ乃公は入らない無用の人物だよ、しかし職を免ぜられて給料に放れた今日、この乃公に對つて、汝の口から貧乏と難儀の道伴は嫌で、自由行動を取りたいといへば、聞き捨てならないさ」

「聞き捨てにならない、おやまア大變な事になりましたね、ほゝゝもし聞き捨てにならないとすれば良人、私を、どうなさる料簡です」

「どうするつて、それを乃公の方から尋ねるんだ、汝の自由行動は、どういふ意味だ」

「私は、言葉通りの意味です」

「言葉通りとは」

「やはり自由行動ですよ」

「その自由行動を聞くんのだい」

「良人、自由行動といふ事が、さう分りませんの、よろしい、では自由行動の解釋を

しませう、つまり外の事では意味を取違へる恐れがありますから、最も適切な現在
 眼前の事實で、良人と私の間を露骨に申しませう、いふまでもなく良人は今日から
 収入のない人で、もし此まゝ行けば良人自身の身體だけでも生活の覺束ないところ
 へ私といふ妻が居ては猶更らの事、とても無事に行ける筈がありますまい、一人で
 食ひ兼ねる運命を二人で食へば餓死を急ぐ外に何の利益もない事は、最も明白な數
 で、かういふ不幸な場合には寧ろ腕を組んで考へるより思ひ切つた決斷力が第一に
 必要です、こゝに涙を呑んでも雙方お互のため、また運命の神に招かれて、引寄せ
 られないにも限りませんから暫くの間、ねえ良人、おのおの個々別々に何等か衣食の
 道を講じた方が、宜いかと思ひますワ、水に溺れた時、兩方から固く組み合つて居
 ては、共に沈みますよ、めいゝが浮ぶ工夫をしなければ、ならないでせう」
 職務に放れて生活を奪はれし上、妻に苦しめられて離縁を迫られし顔色、半泣きの目

を瞬いて無念の唇を噛みながら、

「わゝ分つた、もう、もう乃公は何にも言はない、勝手にせい」

「さう良人、變な顔して怒つたつて、今から仕様がありませんよ、どうせ情と理とは
 兩立しませんからね、かういふ時は勢ひ餘儀なく情を捨て、理を取る方が、安全で
 す、一方のみの安全でなく、雙方の安全を圖る事に私、怒られる理由は、ないと思
 ひます」

「喜んで、喜んで出せるもんか、かゝ考へて見ろ、しかし乃公も、乃公も男だ、これ
 が却つて他日、喜んで出した事になるかも知れない」

「奮發なさい、その氣にならなければ無効ですよ、存在の意味が零になります、私も
 妻として生きられない以上、また別に一個の婦人として生きねばなりませんから
 ねえ」

「どうでも宜い、早く出て行け」

「おや、良人、私を追ひ出す意味ですか、それぢやア良人、違ひませう、私、追ひ出される覚えはありませんよ、到底このまゝでは居られない立派な理由と現在の事實があるため、つまり私ばかりでなく良人の身も思つての事でせう、それを良人、出て行けとは、私を侮辱なさるんですか、私は婦人倶楽部の會員です、婦人倶楽部の會員たるものは、その主義として、いかなる場合も男子より蒙る侮辱を、甘んじて堪ふる事は来出ません、あらためて言ひ直して下さい、出て行けといふ侮辱の下に追ひ出されては、私の生きる將來に於て拭ふべからざる不愉快と不利益とを來します、全體、良人は今日まで、も妻に對して要求するところが、あまり残酷に失して居ましたよ、四年の間、この私は一日だって満足に慰安を與へられた事はありませんよ、もし無遠慮に告白すれば、感謝されて去るだけの苦痛を忍んで來た筈です、それを

出て行けとは、まア何といふ言葉です、妻たるものは人生の都合上に出來た良人の對等物ですが、生涯を束縛された隷屬物ではありませんよ」

癩癩持は出刃庖丁、氣の大きな男は笑うて顧みず、氣の早い男は横面の二撃三撃、張り倒して蹴り出すところを、手も出さず足も出さず口さへ得出さずして其まゝの男泣き、わツと聲を立てぬ、

されど妻に一滴の涙なし、女學生時代の下宿屋を轉ずるよりも猶更ら機敏に手早く心易く、はや既に自己の荷物だけを片付けて、はい、左様な勢ひ、

悲惨また悲惨の極、あゝ人間うまれて腰辯となる勿れの歎聲も漏らす勇氣なく、たゞ呆然自失の體、

かゝる良人に、かゝる妻とは、どこまでも人を無慙に翻弄する運命の神ぞ、

其六

女を馬鹿にする男の多きか、男を馬鹿にする女の多きか、いかに緻密なる統計學者も、今日この統計表を具體的に實數に示せしものなく、十中八九は皆これ互の水掛論を以て終る世の中に、水どころか沸湯を頭から浴せて平氣に澄まし込む蠻勇先生、その細君また近ごろ婦人倶樂部の會員となりし結果、いよくこゝにも夫婦の大喧嘩、良人は四十二の厄年を捻ぢ返して逆に厄當りするほどの勢ひ、加之も辯護士に似合はず訴訟事件の外は殆ど無神經に等しき不得要領の磊落家、細君は今年三十一、これに正反對に神經ますます過敏となりて、いちく物事の理由を正さねば夜の眼も寝られぬといふ精神的の半病人、無慙なる運命の神また此夫婦を弄びて、婦人倶樂部より發せし例の檄文を、さも面

白けにさも愉快けに、その性の異なる兩極端の間に落とし込みぬ、良人まづ手に取りて、ちらと見るや否や、文句も讀まずに其まゝ兩つに折りて、わざと出もせぬ鼻を高音く拭んで捨つれば、婦人倶樂部の初號活字に眼早き妻君、いかで堪るべき、

「あらッ、良人、まア良人、何といふ、眞似をなさるんです」

良人は平氣の平左衛門と俄の改名、

「涙を拭んで見たが、生憎出なかつたよ、いつの間にか、もう風邪の氣は無くなつたんだね」

細君の額に現はれし青筋は、家庭の測候所に心理作用の不穩を兆せし低氣壓、

「良人」

「何だい」

「何だぢやア御坐いません、それを良人、その印刷物を良人、何と思ツて入らッしやるの」

「これか、いちく面倒だから文句は讀まないが、例のグジンクラブから出たもんだらう」

「グジンクラブ」

「さうさ、グジンクラブだよグジンは婦人でなく愚な人といふ愚人で、クラブは俱樂部でなく、女の道に闇といふ意味の闇部だ、ね、愚人闇部、論にも齒にもかゝらない女どもが寄合ツて、お先まッ闇に騒ぐから闇部さ、はゝゝゝ何が婦人俱樂部なもんか、はゝゝゝ」

「良人、御冗談ですか、真面目ですか」

「無論、冗談さ、いくら身體が閑暇だツて、考へて見ろ、あんなものを汝、馬鹿々々

しい真面目に受けて談話が出来るか、愚人闇部だもの」

細君、もはや我を忘れて眼の色は變れり、

「いよく良人、嘲弄なさるんですね」

良人は泰然自若として、野道に立てる石佛の頭を、蚊が刺すほどにも感ぜざる顔色、

「嘲弄するもんか、嘲弄するだけの價値はないよ」

「良人、妻といふ名稱のある私の前のみでなく、婦人俱樂部の全體に向ツても、やはり良人さういふ言葉が出ますか、その侮辱を發する勇氣は、御坐いますか」

「ないね、そりやア無いよ」

「では私だけに、つまり俱樂部全體の婦人に向ツては逆も良人、いひ得ない嘲弄と侮辱とを妻なるが故に、私だけへ平氣で、かまはないんですか」

「なアに、いひ得ない理由ぢやアない、乃公の所謂愚人闇部全體の女どもは他人だ、

ね、その他人の女どもへ、わざ／＼出かけて餘計な事を饒舌る勇氣も洒落氣もないが、汝は縁あつて乃公の妻になつた噂だから自然の人情、そこは夫婦で、こんな事も言ツてやるんだぞ、有難く思へ、一人前の女として満足に男の愛も乞ひ得ず機嫌も取り得ない不具者どもの彼女等、わい／＼騒いで全體、何をする覺悟だ、どうする料簡だらう」

「男の愛を乞うて機嫌さへ取れば、それで良人、女は宜いモンですか」

「もとより、いふまでもないこつた、満足に男の愛を乞へば女として一人前だ、何事も御意に反かず機嫌さへ取ツて居りやア女として遺憾なき女だ、その他に女の役目も功能もあるモンか」

「良人、良人は何を、なさる方です、良人の御職業は、何で御坐います」

「は、ア、汝まだ亭主の職業を知らないのか、何をする人間といふ事を、知らなかつ

たかい」

「いえ、辯護士といふ看板は、よく承知して居ります、こゝへ嫁して来る時から知ツて居ります、知ツて居りますが良人、辯護士は職業中の最も高等なる職業で、つまり權利も義務も人道を無視して出来ない職業でせう、とても無學文盲の没理漢では取ることの出来ない職業でせう」

「知れたこつた、道徳を基礎として法律の運用を効果あらしむる高等の職業だ、その職業が、どうしたといふんだ」

「それほど良人、立派な職業を取ツて、社會の上流に位する良人が、自分の妻といふものを藝妓か淫賣婦のやうに、たゞこれ男の機嫌さへ取ツて居れば宜いといふ理由は、どこから生れて來るんで御坐います、婦人の權能を發揮し婦人の神聖を保護するために起ツた婦人俱樂部が、なぜ醜業婦と同じやうに男の愛を乞はねばなりま

センか、外の事は兎も角、それだけを伺ひませう」

「は、は、は、急に開き直ッて妙な事を伺ひ出したな、汝、汝に限らず今日の女流なるもの、所謂婦人の権能とか神聖とかを擔ぎ廻る女は、いつも口癖のやうに藝妓や女郎を畜生扱ひに醜業婦々々といふが、ありやアあれでも納税の義務を果して居る一個の職業だぜ、醜は婦徳に對する醜で、もし強ひて醜の烙印を彼等の額へ捺さうと思へば、彼等以外の女なるもの皆これ 悉く遺憾なき婦徳を具備した女でなければならぬ、彼等が實際は寧ろ大いに然らずで、彼等を醜業婦々々といふ女どもに最も唾棄すべき醜心婦といふものゝ多いのを知らんか、業でなく心の醜なる女だ、何時でも他に轉ずることの出来る業の醜なるものでなく、ぶツても叩いても轉ずること出来ない、つまり度し難い心の醜なるものだ、加之も醜の事實いづれに多いかといへば、さらに面白い立證を明白に示してやるよ、は、は、は、藝妓の類は業の醜なるの

みで、その面は美だが今日の所謂議論女史なるもの、心の醜なるばかりでなく、その面も二眼と見られない醜が多いぜ、つまり御丁寧に二重の醜だ、また多少の學問藝術を自慢らしく振り廻すが、あの面で汝、學問でもしなけりやア何が出来る、あれで一字も書けない明盲目と來ちやア、それこそ三重の醜で三醜だ、はッはッはッしかし乃公は藝妓に情婦があツて眞頂するンでもなし、また二十年來、女郎買なにか猶更した事もないが、あまり今日の跳ね返ッて返り返ッた胸高の女どもが、いやに獅子ツ鼻を蠢かして萬事に生意氣過ぎるから、實は癩に觸ッて以上の比較を聊か強く注射したんだ、もとより藝妓が宜けりやア、わざと何も汝を妻にする必要はない、しかし乃公の妻になツた以上、その必要だけは乃公の意志に反く事を許さない、斷然あの婦人俱樂部を脱會しろ」

「もし脱會しなければ、どうなります」

「どうも爲ない、そつと捨て、置く」

「捨て、置く、おや、妙です事、いかにも變です、あれほど良人、現に今あれほど噓で吐き出すやうに婦人倶楽部を罵倒しきつた良人が、もし脱會しなければ叩き出すといふべき筈の良人が、このまゝ私を捨て、置くんですか」

「妻とせず捨て、置く意味だよ、全體この乃公はね、じつとして居て罵倒する事は面白くて好きだが、わざと怒つて叩き出すのは面倒だからね、勝手に汝の出るまで、あらためて女の食客を一人、置いた覺悟さ、まさか今まで他人でもないから少々るさい親類の厄介者を一人、たゞ食はして居ると思やア濟むよ、はゝゝゝ年が年中いはゞ複雑した喧嘩ばかりを引受けてる乃公だ、いざ喧嘩となれば喧嘩の仕合も知つてるがね、馬鹿な女どもを相手に眞面目で喧嘩する乃公ぢやアないよ、あんな奴等を相手に喧嘩する暇がありやア、廣告の旗持にでもなつて大道の中央を練つて

歩くさ、はゝゝゝ」

「良人、さすく良人は私を、馬鹿になさるんですね」

「乃公の妻として乃公のいふ事を聞かない女ア、馬鹿に相違ない、馬鹿も馬鹿、一通りの馬鹿でない、たしかに間違ひのない馬鹿だ、頗る念の入つた馬鹿だ、よほど手数の掛つた馬鹿だ、その馬鹿女どもの寄合だから婦人倶楽部でなくて愚人闇部だ、あいつ等ア同じ寄合つて相談するなら、よけいな騒ぎをせずと第一まづ男に見放された時、食ひ外らない用意に何か手内職の下稽古でもするのが先決問題だ、考へて見ろ、丸の内に鐵骨石皮の大建築、ありやア女の臍線金や巾着錢を集めて、あれほど立派な大きいものが出来たと其勢力を天下に誇つてるが、その臍線金や巾着錢は全體、どこから出来た、皆これ男子の餘慶を蒙つて出来たんだぞ、中には自分で働いて自分で作つた金もあると吐すだらうが、その自分が働く間、誰の家に住んで誰

に食はして貰った、聞けば藤原秀子とかいふ死損ひの狂氣婆が音頭取で、いや三萬圓を寄附したの、いや四五萬の財産があるのと、怪しからん事を囃し立てるよ、未亡人といへば後家だ、後家の金は亭主の遺産であるといふ事が、分らないか、また近ごろ頻りに女子の獨身とか女子の職業とかいふが、その獨身は精神上と身體上いづれかの缺陷を示した證據で、職業また直接間接に男子の援助を放れて何が出来ない、女といふものは全然これ男子の玩弄物で澤山だ、男に媚を呈して飽かれないやう朝夕の面でも磨いて居りやア十分だ、男のため快樂の提供物となつて満足すべき動物だ、その用をいへば人種の繁殖器で結構だ、權能も神聖もあつたもんか、社會の進歩とか人類の向上とかいふのは男子側の專賣特許だ、女子の立入る舞臺でない、しかし時勢の體面上、あまり粗末にして置いちやア却て男のため、同じ玩弄物にしる、お慰みが薄いから昔より多少の取扱ひを違へてやつたんだ、それを有難

いとも思はず、づうぐしく圖に乗つて、まだそれ以上、よくしてくれとは、よくも吐した、抱けば負へとの世諺、いかにも慾に目のない女の本性を現はしてるよ、抱かれるだけで彼等の慰安は遺憾なく盡きたりだ、男の脊に負はれたのは業平朝臣の遁げた時と桂川のお半長右衛門ばかりだぞ、熊とでも取ツ組みさうな體格で石臼のやうな尻を持つた當世女を脊負つて歩けるかい、でこくの廂髪だけでも餘計なお荷物だ、もし卑近に單純に肉體交接の斷絶を以て戦うても、雙方からお互に辛抱を仕合へば、きつと必ず男の方が勝つぞ、争はれない證據として、無人島に流された男は三年でも五年でも乃至また生涯でも無事に生きてるが、女の無人島に流されて一年以上、男なるものを眼に見ざれば忽ち精神に異状を來すさうだ、その男に反旗を翻すやうな彼等の舉動に發狂めいた點のあるのは當然で、さらに何の不思議もないが、どこまでも不思議もないで通せるか、やれるなら、やつて見ろ、馬鹿々々し

い、ふざけた女どもだ、それほど男に大切がられたいと思へば、嗚アの靴へ手をかけて高いところへ押上げるやうな男のある國へ何故、なぜ生れて來ない、我この日本國では、お生憎様、さういふ調子で問屋は卸さないぞ」

罵倒も罵倒、嘲弄も嘲弄、侮辱も侮辱、こゝまで露骨に大膽なる蠻勇を振へば、もはや婦人の權能も神聖も鼻息に吹き飛ばされて、その亂暴に呆れ返るか、その氣焔に恐れ入るか、いづれにせよ二度と再び口を開き得ずして、たゞ無念殘念の口惜涙に泣いて焦慮るより外なし、

「どうだい、やはり元の妻として居るか、また厄介女となつて食客で居るか、但し愚人間部へ駈け込で御注進々々々々出かけるか、以上三件を以て要領を決す、どうでも勝手次第だ」

其七

社會いかに複雑になるも、人生いかに不可解なるも、べらんめエの一語を以て最後の斷案とせる一階級ありて、これを江戸ツ子式の勇み肌といふ、

世界の日本となれる今日も、日本の東京に依然たる江戸ツ子を振り廻して、べらんめエに絶對の神靈を宿し、感極まれば唯これ畜生と叫ぶ外に言葉のない三四人、寧ろ學者の議論よりも面白し、

「おい、どうでエ、聞いたか、大變な世の中になつたぢやアねエか、いよく男と女が、兩方から取ツ組み合ひの戦さを始めるさうだぜ」

「べらぼうめ、男と女の戦さア今に始まつたこつちやアねエ、開闢以來、昔から絶えず取ツ組み合ツてるから世の中に人種が盡きねエんだ」

「ところがね、乃公なンかア近頃、あまり取ツ組み合ひを始めねエぜ」

「いくら始めたくツても、手前の相手になツて取ツ組まれる女があるけエ、そのくせ追ツかける事だけには素早ツくツて抜目のねエ奴だが、よくく戦さが下手だな、いつも相手に逃げられてばかり居るぜ、ざまア見ろ」

「全くだ、蹇の女にでも出ツ喰はさなきやア當分、まア逆も満足に取ツ組めねエなア」

「ふざけるな、名もねエ雑兵葉武者に眼をかけず、あれか、これかと四方を見渡して敵を選ンでるからだ」

「あれか、これか、どれかと選ぶうちに敵の方から皆ちりぐくに御免を蒙ツて、さつさと逃げ失せにけりだらう、はゝゝゝ」

「冗談は置いてよ、丸の内に婦人倶楽部といふ、でツかい建築があツてね、その中へ立籠ツた女武者が、いよく世間の男に向ツて一戦争をするんだ」

「ゼンてエ、どういふ女武者が立籠るんだい」

「天下の男を相手に引受けて一泡、吹かさうといふんだもの、どうせ一通りや二通りの生優しい女ぢやアねエよ、多年連れ添ツて来た亭主を振り捨てたり、一時は骨も皮も舐め合ツた色男を思ひ切ツたり、親類縁者に見放された後家も居りやア、親兄弟のいふ事を聞かねエ娘も居るだらうが、兎も角も騒ぎだね、うかく、氣の弱い奴ア寄り付けめエ」

「何の事アねエ、つまり世の中の恩も義理も知らねエ薄情な阿魔ばかり寄り集まツたんだな」

「いや、男を振り捨てたといふが實ア男に愛想を盡かされて、どこへも行き場所のねエ女ばかりだぜ、一人に一人づつ男の胸倉を取ツちやア、すぐ蹴飛ばされて逆も叶はねエからな、大勢一時に押出して平生の怨恨を晴らさうといふんだよ、それに相違ね

エ、さうでなくツて女が男に喧嘩を賣るといふ法は無からう、まづ世の中の調子は男と女が七分三分で當然だ、そいつを五分五分にしようとするなア女に無理があるよ」

「さうとも、お互だツて山の神と五分五分ぢやア、とても夫婦になツて居られねエからなア、氣で持つ男だ、癩に觸る事がありやア遠慮なく横ツ面の一撃も、なぐれるから鼻アだぜ、他人の女で承知の出来ねエところを、泣きながら承知してくれるから乃公なにかア汗水に働くんだ、いちくく鼻アに文句をいはれて亭主關白の位が、どこにあるかい、をりくく乃公だツて夫婦喧嘩もするがね、その喧嘩に乙な味があるよ、いふにいはいれねエ美味があるよ、本氣の沙汰で喧嘩すりやア夫婦でねエぶろくだ、はくく」

「ところが今日のハイカラ夫婦は皆、ぶろくくだぜ、年が年中、あゝ野暮な文句澤山で交情が悪けりやア、始めツから夫婦にならねエが宜い、なツた以上、仕方があるもんか、放ツた屁も臭くねエ料簡で、どこまで一蓮托生だ、なアおい」

「知れた事よ、人間業で自由にならねエ縁といふものがあツて繋がツた夫婦だ、それを今更人間業で彼はいふなア間違ツてるさ、理窟も絲瓜もあるもんか、第一また夫婦は生んでくれた親にさへ隠して言はねエ事まで明かし合ツてる交情だらう、その夫婦の間に起ツた事を、ぶろくくしく世間へ持ち出すたア恥を知らねエ奴等だ」

「だがね、今度の戦さア夫婦喧嘩ばかりぢやアねエさうだ、まだ亭主を持たねエ若い女も随分、立籠ツてるやうに聞いているぜ」

「そいつア猶更悪い料簡だよ、これから亭主を探して持たうといふ女が、男に双向ツて何の徳があるんだ、あたら花の色香が失せらア、よく今のうちに言ひ聞かしてやりてエなア」

「なアに、まだ公然に極まつた亭主は持つまいが、其女も實ア男に人の知らねエ脇鐵

砲を喰ツた女だよ、着物を剥いで見ろ、とんでもねエ痣が脇腹に出来てるぜ、は、は、は、

「脇腹に痣なら宜いが、もし真正面の腹の子でも出来てるのを知らずに居りやア大變だな、それこそ捨場のねエ厄介だぜ、どうなるだらう」

「さア事だね、手前どうするい」

「どうするツて、乃公の子ぢやアねエ」

「今更卑怯に手前、ねエで済むか、なくツてもさ、かうなツた話の行き掛りだ、自分の子にして考へて見ろい」

「困るなア、しかし男を相手に自棄半分の戦さをするやうな女だから、さういふ料簡の太い女に限ツて受ける時は手當り次第、随分、廣く受け込むからね、乃公の子か誰の子か知れたもんぢやアねエ、きツと色んな種が混み合ツた交りツ子だぜ」

「どうだい、交りツ子でも何でも、身に覚えのあるこツた、ぐづくいはずに潔く

引取ツてやれよ、幸ひ手前の鼻アは逆も出来ねエ體質だぜ」

「馬鹿にするない、談話だ、は、は、は」

「談話は談話にしろ、折角こゝまで實の入ツた談話だ、これを此まま立消えにするなア惜しいよ、いッそ今夜ア、めいゝ家へ歸ツて、何といふか山の神の心底を伺ツて見ようぢやアねエか」

「どう伺ツて見るんだ」

「もし世の中の男と女が右と左の兩方に別れて、いよゝゝ戦さが始まツたら、どツちへ味方するといふ料簡を慥めるんだ」

「そりやア聞くに及ばねエ、安心だ、始めツから馬車や自動車へ乗りたくツて來た鼻アでなしよ、また連れ添ツた亭主に理窟を捏ね廻す學問なア夢にもして居ない

「からね、もとより共稼ぎの共難儀を承知の上の御臺所だ、めちやくに理由もなく只この乃公が嬉しくツてあゝなツて居るんだよ、そんな事を今更改めて聞きた、それこそ大變だ、すぐ向脛へ嚙り付かれるね」

「こん畜生、ぶんなぐるぞ」

「鼻アの機嫌さへ損ねなきア朋友に一撃や二撃、ぶんなぐられても宜い、鼻アも亦、さう言ツてるよ常に、お前さんさへ見捨て、くれなきやア、わたしは三度の御飯を食はなくツても堪忍するとさ」

「おい〜聞いたか、この野郎、どうかしたぜ、をかしく變に面の雑作を崩して聲まで變ツて来やアがツた、大丈夫か、氣を確實に持て」

「大丈夫だ、氣は確實だが乃公の鼻ア、今ごろ何をしてるだらう、朋友甲斐に、ちよいと見て来てくれ」

「は〜、あまり馬鹿にされて、此方の氣が變になツて来たア」
理を外れし情、智を失ひし愛、最も卑近なる無學の談話に最も高尚なる人間の眞實を宿せり、

「おい鼻ア今、けエツた」

「おや、お歸り、今日は何故、かう遅かつたの、もう少し早く歸ツてくれ、ば宜いに、長屋中の總出で大變な騒動だツたよ」

「小火でもあツたのかい」

「小火どころかね、なか〜一時は盛な火の手さ」

「どこだい」

「奥の熊さんの家さ、いつもの例で、あまり珍らしくもないからね、また始まつたぐ

らるで居たところが、お前さん相變らず、どたんばたんの末が、きやツといふ聲だらう、すると熊さんが青くなツて醫者へ飛び出すといふ大騒動、打撲所が悪くツて氣絶したんだよ」

「は、は、をどかすない、しかし熊の鼻アは平生から料簡の間違ツたよくねエ女だ、この長屋中で鼻アのくせに新聞を取ツて讀むといふ調子外れの太エ阿魔だからな、それも自分が一人で内々そツと讀めば、まだしもだが、わざと字の讀めるのを自慢に大きな聲で、いや何處の芝居が何の藝題で初日だとか何處の呉服屋が二割引の景品附で賣り出したとか、いや今年の流行模様が何だの彼だのと、ろくでもねエ事ばかり觸れ歩きやアがツて、考へて見ろ、皆いち／＼亭主の責め道具ぢやアねエか、よけいな毒を流す女だぜ、第一また熊の野郎も少々甘納豆だよ、うぬが一生懸命、まツ黒になツて稼いだ錢で鼻アのために文句も得いはず月々の新聞代を滞りなく拂

ツてる間抜けだからな、しかし其處まで甘味澤山の熊が、ぴり／＼と急に辛くなツて氣絶さすほどの騒ぎは、よく／＼のこツた、どうしたい、うまく胴ツ腹の急所でも覗ツて、そのまゝ息の根を止めたかい」

「ところがね、お前さん、熊さんの驚きやうツたら、ないんだよ、まるで喧嘩腰に横町の醫者を引ツ張ツて來てさ」

「何、息を吹ツ返したア、熊も熊だが、氣の利かねエ敷醫者ぢやアねエか、え、おい、もし乃公が病氣になツても、そんな筈は止してくれエ」

「あら、お前さんの病氣には早く癒ツた方が宜いよ」

「は、は、さうだな、や、ありがてエ、時に何が原因だツたい、その騒動は」

「わたしも委しくは知らないがね今、ちよいと差配さんに聞いて見たら、このごろ丸の内には婦人倶楽部とかいふ、亭主の不身持を訴へて出る役所が出来たんださうだね」

「おツと、それか、そいつかい、はゝゝゝそれなら乃公も現に今、さんざ朋友と話して来たんだ、はゝゝゝ熊の野郎、柄にねエ新聞代を拂ツた報いで、いよゝゝ鼻アを魔道へ引摺り込まれたんだな、鼻アも亦その日暮しの亭主に連れ添ッて居ながら生意氣に新聞なんか讀む罰だ、ありやア汝、亭主の不身持を訴へて出る役所ぢやアねエよ、亭主に限らず世の中の男に見放された女が自分達の身の振方を相談する場所で、その相談が纏まらねエ苦しませの自棄半分に今度ア、世の中の男に向ッて生命がけの大喧嘩を吹ッかける狂氣沙汰だよ、つまり不貞腐ッた阿魔の集會所だ」

「おや、おやゝゝ、おやまア、さう、とんでもない不料簡な人達だねエ」

「だからさ、男の方でも捨て、置けねエといふコツて、いよゝゝ男の俱樂部が出来たとよ」

「そりやア出来るワね、熊さんぢやアなし、女に楯を突かれて凹垂れるやうな男があるもんかね」

「全くだ、もし世の中が乃公と汝のやうな夫婦ばかりで、かうして暮しやア天下太平だが、ねエおい、はゝゝゝところで今日の天下太平は、どうだね」

「あ、買ッて置いたよ、だがね、お前さん今日は都合が悪いから、一合でいゝだらう」

「宜いとも、宜いとも、この貧乏世帯を乃公一人で飲ンぢやア濟まねエが、前世の約束と思ッて、まア堪忍しろ、ね、その代り飯の一二杯は控へてらア」

「いやな事、お言ひでないよ」

「だッてさうぢやアねエか、乃公が一合でも酒を飲めば汝に一杯でも、よけいな飯を食はしてエさ」

「うるさいねエ」

「うるさいところが、人情だぜ」
「わかッてるよ」

「いやさ、わかッて居てもね、いひたくなるよ」

「困ッた人だねエ」

「困ッた人を何故、どこがよくッて亭主に持ッた」

「知らないよ」

「はゝア、御存じ御坐いませんかい」

「あまり馬鹿にすると、わたしも丸の内の人倶楽部とかへ立籠るよ」

「や、降参、降参、早く降参して早く飲みてエ」

「ほゝゝゝまさか一合で酔ひもしまいが、早く飲んで遅くまで、ぐづぐづいはれては」

「いはねエ、黙ッて寝る」

「しかし、ねエ、お前さん、まゝならぬ浮世だね、すきな御馳走を並べて二三日、もう飲めないといふほどに、飲まして上げたいよ」

「やいゝ、やい、そんな事、言ッてくれない」

「本當だよ、わたし、せめて日に五六十錢でも取る手に藝でもありやア、ねエ」

「ちゝ畜生ッ、乃公を泣かしやアがるんだな」

「お前さんより常に、わたしが心で泣いてるよ」

「やア、乃公を、どうするんだい」

このごろ頻りに流行る男女の間に、満身の愛を捧げますといふ言葉は、かゝる夫婦の間に遺憾なく解釋されたり、

其八

経歴年數いまだ重役の地位に達せざれど、或る大會社の必要人物と稱せられ、加之も手腕家と交際家とを兼ねて所謂今を盛んの發展家、今年こゝに三十九の元氣旺盛、細君また固より婦人倶楽部の會員ながら、この細君の會員たる目的は一時の方便にして、敵は本能寺にあり、實は第一に妾宅攻撃、第二に花柳の出入禁止、

「良人、折角、出來ました夕御飯も召し上らずに今から、急に何處へ入らツしやるンです」

「ちよいと會社の内用で、思ひ出した事があるから或る人を訪問するのさ、明日に延ばされないこつた」

「おや、さうで御坐いますか、お車を」

「いや、車は入らない、電車で行かう」

「どこまでですか、お車の方が御便利でせう」

「なアに幸ひ電車の通じるところだ」

「どちら」

「さう汝、いちく乃公の出先を聞かなくツても宜からう、會社のため椅子にばかり嚙り付いてる乃公の役ぢやアないから、判で捺したやうに出先の都合も時間も分らないよ、まして今日の人間は社會に對する交際の動物だからね」

「御交際の事は、承知いたして居りますよ、しかし何時、どういふ用事の起らないにも限りませんから、せめて御出先へ電話のかゝるやうにして置いて戴きませんと、をりく困る事が御坐いまして、現に良人、昨晚も大阪の支店から、ウナの電報がまるツた時には、困りましたよ、どこへ、お知らせ申して宜いか、さッぱり分りませんもの」

「や、止さう、面倒だ、無理から明日に延ばさう、全體、汝は官吏なら巡査とか商人

なら舊式の通ひ番頭とかいふやうな、時計の針と共に一定の行動する人の妻に適當だね、乃公のやうな千變萬化の經濟界へ飛び出して間斷なく活躍する人間には少々困るよ、いち／＼猜忌の眼を放つて、あまり立入つて監督が厳し過ぎるからなア、まるで保釋中か刑の執行猶豫でも受けてるやうだ」

「おや、良人、妙な事を仰しやいますのねエ、猜忌の眼を放つてるとか、監督が厳し過ぎるとか、それも宜う御坐いますが、保釋中とか刑の執行猶豫とか召使の男女に聞えても良人、第一、良人の御人格に拘はりませう、も少し何とか、お言葉のありさうなもんですわねエ」

「はゝア、よほど氣に觸つたやうだね、しかし乃公は實際、さう思つてるよ、さう感じてゐるんだよ」

「何故で御坐います」

「何故でも乃公は、さう感じてゐるんだ、もし口に出さなければ汝、知るまいが、口に出せば正直に今いうた通りだ、家庭の事は汝が主宰者だから、なるほど汝のいふ事に従ひもするが、門外の事は一切、この乃公のする事に差圖がましい儀は、眞平だ、内外、判然としてほしい」

「いくら内ばかり判然といたしましても、外が良人、不判然ではねエ」

「何が不判然だ、どういふ外に判然たらざる點がある」

「ほゝゝゝ、此頃の空模様と同じやうに、はつきり致して居らないかと考へますワ」

「汝こそ、をかしく變に持つて廻らず直接、露骨に、考へた不判然の點を、はつきりといふが宜い」

「はつきり申しても、宜しう御坐いますか」

「宜い、何だ」

「これはね、良人、これは世間に往々ある、嫉妬から申すんでは御坐いませんよ、あの築地に良人、ね、あるでせう、おあんなさるでせう、あの女が、新橋に居った、きれいな女が、名古屋種の、ことし二十二で、ね、良人、さうでせう」

まさか知るまいと思ひの外、天機いづれより漏れしか流石の旦那殿、ぐツと押し詰りしが、もはや露現の上は隠して隠されぬ此場の始末、聊か捨身の體なり、

「あれか」

「おや、大變お手輕で御坐います事、さう良人お手輕の女ではないんでせう、ほ、ほ、あれか、あれか、ほ、ほ、たゞ良人、あれかでは、あれが定めて怒るでせうに」

「あれかさ、あれのことたらう、ありやア汝」

「何で御坐いますの」

「ありやア汝、何でもない、あれさ、つまり何だよ、當分、ちよいと捨て難い事情があつてね、已むを得ず」

「ちよいと當分では御坐いますまい、もう良人、二年越になつてると聞いて居りますよ、また築地の家も地面も今年の春、あれの所有になつたさうで御坐いますねエ、どうせ捨て難い、深い、深い御事情があるんでせうから、その事情だけ良人、お聞かせ下さいな」

「出来た事は出来た事で、さう攻めなくツても、そのうちに何とかなるよ」

「いゝえ、何とか、なさる前に其、その捨て難い事情といふ事情を」

「よし、や、よろしい、多少、すまないと思へばこそ遠慮して、言ひ兼ねて居たが、さう汝が押し詰めて、そこまで聞くなら乃公も、いふ」

「おツしやい、承ります」

「あれはね、乃公の妾だ」

「妾」

「妾とは妾だ、世間の通語、めかけだ、てかけだ、いはゆる隠し妻だ」

「かくし妻、妻は良人、二人あつても宜しいので御坐いますか」

「だから正妻とはいはない、かくし妻といふんだ、聊か他に憚る意味の妻だ、正妻は汝だらう」

「勿論、私は妻で御坐います、私の外に、かくしても、かくさないでも、また妻といふものが」

「ある、あるよ現在、この乃公にある、決して自慢はしないが、問ひ詰められて打ち明ける、乃公は汝の外に妾を持つてるよ、たしかに持つてる」

「さう今更急に念を押さなくツても、わかツて居ります、ずつと前から承知して居り

ます、しかし良人、その妾を、いつまで、持つて在らツしやるンです」

「いつまで持つてるか、そりやア將來のこツた」

「他人のめかけと違ひ、良人のめかけで、良人が、どうなるか將來の事といふ筈は御坐いますまい、生涯あのまゝにして置くとか、また、今どうするとか、こゝ二三年とか、何とかお考へがあるでせう、常に經濟界の前途でさへ見越して御演説なさる良人が、良人の自由になる女一人を」

「おい、汝、もし生涯あれを捨てず、捨てる事が出来なくなツて、あのまゝにして置くといへば、どうする覺悟だ、まづそれを聞かう、汝は此ごろ世間で喧しい婦人俱樂部の會員になツてる事を、乃公は知ツてる、知ツてるが今日まで何にもいはないのは、この乃公に對して、實は汝の態度を見て居たんだ」

「おや、私は俱樂部の會員になツたから、良人は、めかけを置いて差支へないと仰

しやるんですか、つまり婦人倶楽部と藝妓あがりの、めかけと、交換の意味で
すか」

「さア来た」

「何が来ました」

「婦人倶楽部の會員が来たといふんだ、今こゝに居る汝は乃公の妻としてでなく、婦
人倶楽部の會員として向ツてるんだらう、いはゆる侮辱を蒙ツたとか、婦人の神聖
を汚されたとか、其方で來てるんだらうといふ事さ」

「いゝえ良人、婦人倶楽部の會員たると會員でないのは別としても、妻は良人に對し
て、妻以外の女に關する事を」

「詰問する権利があるといふんだらう、いや、あるだらう、自然の人情、ある筈だ、
筈だがね、こゝを汝、よく聞いてくれないと困る、乃公と汝との間には幸ひ十一と

九歳になる男女二人の子があるから、乃公は世間にある申譯で子を得るための妾と
は、いはない」

「藝妓あがりには、子の出來ないもんださうです」

「まア黙ツて聞けよ、ぢやア子の事は置いて、乃公は他人のやうに妻妾の美醜を取捨
した理由でもない、さらに一家といふ上からは無論、あれは有害無益で、以上いづ
れの點より見ても、よくないといふ事を承知して居るさ」

「それほど良人、よくない事を承知して居て」

「承知して居るが全體この乃公は今日、どういふ境遇で、どういふ社會に、どういふ
仕事をして、どういふ人間に交はつてるかといふ事を汝、少しは考へてくれないと
困るよ、もし嚴格なる宗教上から見れば、砲火間斷なき血戦よりも猛烈なる競争場
裡に立ツて營利會社の、加之も其會社の樞要に居る乃公は一切これ實に罪の深いも

ンだ、また道徳論にかけても殆ど零だ、もとより君子の道に外れてるよ、しかし時勢の要求と餘儀なき四圍の情況とが乃公のやうな人間を、一日も家に遊ばして置かない、絶えず世の中へ引摺り出して、あくまで働けといふ時だからね」

「働けば、めかけを置いて構ひませンの、めかけ手かけは男の働きで、男の甲斐性といふ、それですか」

「さうにも、かぎらないがね、あまり仕事に激しいので身體が續かないよ、をりく、頭腦が痛くツて、どうにもならない時がある、第一また会社に居れば会社に居れば家で、外へ出れば外で、かう蒼蠅く人に追ひ廻される乃公として、人の知らない、誰も來ない、手足を伸ばして横になる隠れ場所の一軒ぐらゐ、許してくれても宜いぢやアないか、まさか召使や子供の手前、妻の汝に寢轉びながら馬鹿な冗談もいへずさ、あれなら高が藝妓を金で買つた女だ、嫌になれば何時でも叩き出せる

し、月々幾何づつか仕送ツてやる間は頗で使はうが足で使はうが勝手次第で、あれも當然と心得てるだけの取柄だ、ね、もし乃公があれに對する態度で、汝に向へば汝、どうする、たとひ汝は辛抱するにしても、それこそ一家の取締上、乃公も汝も共に出來ないぢやアないか、して見れば自分の勝手をいふやうだが、結局、妻に忍び難いところを擧げて、悉く妾に平氣で脊負はせるんだ、寧ろ妻に對する一種の敬意を表してゐる理由だ、もし乃公が途中で家屋崩潰の大地震にでも出逢つたとすれば、こゝへ走ツて歸るか、築地へ走ツて行くか、我を忘れて汝、どツちへ足が向くと思ツてる、こゝを間違ツてくれると、妙な事になるんだ、また經濟の點からいへば、ちよいく、一升米を買ひに行くより俵で買ひ込んだと同じ算盤だ、あれのために汝を粗末にするやうな世間の妾狂ひでない、無論あれのために子供の事を忘れた事のない以上、たゞ一時の慰み場所だよ、汝や子供の居る此家を慰み場所に出來るかね、

かういへば汝また慰みの程度が卑しい、つまり趣味が淺薄で劣等だといふだらうが、趣味の程度論は別問題だ、どうせ汝、最初から高尚な理想家でもなく立派な宗教家でもなく人を教へ世を導く學者でも教師でもない乃公を承知の上、良人にした汝だ、いッそ捌けて、大きく碎けて、あれを一度どツか、演劇へでも連れて往ツちやアどうだい、あれを汝、あまり重く見過ぎて高く買ひ被ると、いけないよ、はゝゝゝしかし乃公は汝に對して、よくない、すまない點があるよ」

流石は交際家を以て聞ゆる旦那殿、細君の角を折らず曲げず、其まゝ靜に撫でて押込めば、此財産と此良人と二人の子まで捨て、婦人俱樂部に立籠るほどの勇氣なく、元來は敵本主義の細君、聊か返り討に逢うたる顔色、

「兎も角、今夜、よく考へまして」

「よく考へてくれ、感情の高まつた時は、どんな人間でも多少の考へ違ひといふ事がある

るがね、なアに冷靜になツて見りやア、さう世の中に腹の立つ理由は無いもんだよ」
 「別段、さう腹の立つ事も何も御坐いませんが、實は婦人俱樂部の、會員になツて居りますから自然、今までよりは」

「さうだらう、ありやア最も婦人の高い理想を遺憾なく立派に掲げたもんだから、あの婦人俱樂部を標準にすれば今日の天下に男として満足な奴、一人もないよ、はゝゝゝ、わけて乃公なにかア問題になツて居るまい」

わざと婦人俱樂部に鋒を向けずして、圓轉滑脱、はゝゝと笑ひ退けし外交手段、細君ますゝ攻め口を失うて、いかにも油斷のならぬ旦那殿なり、

其九

あまり白日青天の下に忙しからぬ狭斜の巷、なまめかしい御神燈の奥に仇めきし女

七八人、いはゆる樂屋談話の四邊かまはぬ聲を張り上げて、白粉臭き氣焰萬丈、
 「どうなるだらう、このごろの喧しい婦人俱樂部と男子俱樂部、いよく戦さが始ま
 るさうだワ」

「どうなるもんかね、きつと負けるよ」

「どツちがさ」

「女の方が負けると極まってるよ、いくら威張ったって、いくら力んだって、無効だ
 よ」

「なぜ無効なの、きいて見ると大變な勢ひださうだよ、世の中の男を皆、從へて仕舞
 ツて出入りのたんに履物を直させるまで、やるんだとさ」

「世の中の男が箱屋さんぢやアあるまいし、いくら勢ひばかり大層だつて、いざとな
 れば無効さ、何故ツて考へて御覽、あの人達は初陣だもの」

「初陣」

「初陣さ、男を相手の戦さにかけては、憚りながら妾等こそ腕に覺があるんだよ、口
 先ばかり達者な、そして物の表も裏も知らない、あの人達に男の呼吸が分つて堪る
 かね、とんでもない謀反を起したものださ、つまり藪蛇だよ」

「ほゝゝゝさういへば全然、さうだワねエ、高が親がかりで浮世の苦勞知らずに袴を
 穿いて靴を履いて眼白押のやうに何十人とか何百人とか一塊物づつに本の上の修業
 したんだもの、いちゝ子飼から雛妓時代を経て一本になるまでの妾等が艱難辛苦
 と比較物になるかね、男を敵に取つての斷引學校ぢやア博士の妾等へ一言の相談も
 挨拶もなく、だしぬけに勢揃ひして、あんな旗擧げするたア無分別な人達だよ」
 「それに就いて過日も、姐さん達が内々での談話だよ、妾等の羽振を利かすのは今こ
 こだから、めいゝしッかりして油斷しちやアいけない、かういふ時に働けるだけ

働いて稼がなきやア稼ぐ時が無いツて」

「さうともね、妾等は帆前船と同一物で風さへ吹けば、どうにも動けるが、風のない時は全く居据りだからねエ、すまないが世間に波風のある方が稼ぎ易いよ」

「だがね、浪風があまり高くあり過ぎて困るよ、をりく難船するから」

「だつて世の中の不景氣から来る浪風ぢやアないから宜いよ、結局お客の家に起る浪風は妾等の方角が港灣に當るからね、追風に帆かけて、それこそ這入ツて来るよ」

「ほゝゝゝさうなると港口も大繁昌で随分、忙しいワね、いやに慾張るやうだが一人で働くのは惜しいよ、さぞ混み合ツて、雑踏するだらうから」

「雑踏より何より第一あの人に逢へないから困るんだらう、お氣の毒だね」

「御深切さま」

「お互で御坐います」

「また始まつた、うるさいねエ、當分まア情人を除外にして、セツセと稼がうぢやアないか、色よりも慾の世の中さ」

「だがね、かういふ時に慾張り過ぎると後が利かないから却て、いけないよ、稼ぐは宜いが、こゝでこそ藝妓といふものの價値を立派に見せるのさ、世間では妾等を嘘と慾との化物かなんぞのやうに思ツてるが、嘘の皮でも慾の器物でもなく案外に親切なところを見せて、なるほど藝妓も社會進歩の必要物で男子奮闘の慰藉物であるといふ事を」

「よウく、さア演説が始まりました、皆さん立膝は、いけないよ、敬禮、敬禮」

「あら、ませツ返しちやア、いやよ」

「だつて、さういふ口調を此際うかく使へないよ、そんな四角張ツた難しい事をいふと折角のお客も遁げ出すよ、婦人倶楽部の間諜者と見られるからね、なるべく甘

ツたれて今までよりは一層、ねエ良人、よウ良人の鼻聲で行くのだよ」

「やはり、それに限るかねエ」

「限らなくツてさ、どこの旦那も家に居りやア、むか〜腹が立ツて癢に觸ツて、気色の悪い時だもの、その溜飲を下げに来る眞正面から同じやうに四角張ツちやア夾撃だよ、五分五分の敵となれば、どうしても浮氣稼業の此方は損だよ、お粗末でも人情、やはり彼方へ傾く道理だからね、もし出来る事なら今のうち婦人倶楽部を焚き付けて、ます〜火の手を盛に旦那を怒らせる工夫が宜いんだよ」

「なるほどね、そりやア、さうだワ」

「機會よくば本城を乗ツ取るのかね」

「まア、其くらゐの意氣組で掛るんだね、冗談でなく玉の輿は電車より易く乗れる時なんだよ」

「追風に帆かけた船が港口へ混み合ツて、玉の輿が御神燈の門並に押寄せるんだねエ、ほ〜、あら忙しい事」

「しかしね、あまり贅澤に選り好みすると、乗り損ツて口を開く事があるから、まア三日か五日ぐらゐづつ順番に乗り歩くのさ」

「この村の豊年だワねエ」

「敵と紛らはしい束髪は禁物だから、イツそ皆、丸髻になツて待ち受けるんだね、さアといへば、すぐ乗り込で、それからそれへと奥様に据り歩く騒動の最中、うかうか髪なんか結び直してゐる寸隙は、ないだらう」

「さうなれば一列一體、お互に引き祝ひは廢止だよ、いち〜同じ事を面倒だからねエ」

「妾は、どうしても、あの方の玉の輿へ乗りたいワ」

「先様が急いで在らツしやるよ、どうせ混雑の際だから、うかくすると他人に乗り込まれるよ、あの方も、この方もあるもんかね、何でも構はない手あたり次第、見あたり次第に飛び乗るのさ」

「大變な騒動になツて來た事ねエ」

「よくまあ學問をせずに濟んだよ、かういふ時に學問でもありやアそれこそ無理にも丸の内へ立籠らせられるんだらうに、しかし運わるく妾、伯父さんに引取られて學校へ遣られるんだツたよ、まあ助かつた、有難いわねエ」

婦人俱樂部も男子俱樂部も、この手合にかゝりては粉微塵、一文の價値なし、

其十

男子うまれて富を得ずんば農に歸すべし、もし劍を執らずんば筆を執るべしといふ新

聞記者、社會の木鐸を以て任ずる眼より男女俱樂部の開戦を見れば、太平無事の今日、實に這個の好問題なり、

都下に最も有力なる新聞は、この深辣なる記者あるためなりとまでいはるゝ男、細君また最高女學校の出身、婉曲の筆は寧ろ良人に優るとの公評あり、

「ねエ良人、いよく始まるさうですが、どうなさいますの、社の方では全體、どういふ態度を取るんですか」

「無論、公平無私さ、營業方針から割り出せば、この機に乗じて多少の擴張策もあるが、記者としての乃公は斷じて渦中に投じない、現に社主の細君も走ツたやうだし、主筆の鳴ア殿も幸ひ例の不平を遺憾なく爆發さして、ごたくの最中だから、或は妙な注文が出来ないにも限らないが、乃公は社會部を引纏めて立派に新聞記者たるの職責を全うする決心だ、その他いかなるところから如何なる壓迫を加へられて

も、あくまで乃公は公平無私だ、ついては汝、汝も乃公に關せず、別に一個の婦人として自分の意志通りにするが宜い、かういふ際、をかしく互に曖昧ぢやア却て不幸だよ、おのく信ずるところに従ふの外なしだ」

「別に私、わざわざ良人に反いてまで、別に一個の婦人となつて、あの騒ぎの中へ這入りたくはありませんから、兎も角も私に對する良人の考へを、忌憚なく、言ツて戴きたいんですよ」

「は、ア、良人としての乃公が、妻としての汝に對してだな、つまり社會舞臺の新聞記者でなく、家庭に於ける良人の資格で妻に對するんだな」

「さうとなれば、乃公は妻に向うて、委任した家庭以外に良人の許可を得ずして行動すべきものでないと断定する、良人を除いて妻なるものゝ存在を認めない、だから

別に一個の婦人としての行動は意志の自由に任して強制しないが、しない代り既に良人は妻を去つたものとするよ」

「ですともねエ、實は私も、妻なるものを以て別に一個の婦人とは思ツて居りませ
ン、或る程度まで或る意味に於て婦人の自由を奪はれたでなく至然に消滅したものと
思ツて居りますから、丸の内の婦人倶楽部には寧ろ反對です、この際どういふ事
があつても私は、動きません、たとひ學校時代の、お朋友と絶交しても、私は妻と
して動きません」

「む、實際、その決心かね」

「もし丸の内へ行くとすれば、意志の自由を強制しないといふ良人を偽らずに、まる
りですよ」

「いよく動かないね、乃公の妻として」

「動きません」

「よし、わかッた、この際いよく動かないとすれば無論、かの婦人倶楽部と意見の合はない汝だ、意見の合はないのは、つまり婦人倶楽部を以て有害と認めるんだらう、會社に對して家庭に對して殆ど破壊主義のものと見られるだらう」

「まア、さういへば、さうですネエ」

「ところで乃公も、新聞記者として社會に立ツてる以上、かういふ面白い人生の一大問題に向うて思ふ存分に活躍して見たいよ、公平無私は公平無私だが、その公平無私私は男女兩倶楽部に對してでなく、人道上の公平無私なるが故に、寧ろ實は婦人倶楽部に一大打撃を喰はしてやりたいんだ、その渦中に投じないとは、つまり汝の決心を試みたんだよ」

「ほゝゝゝ私も、さうだらうと思ツて居ましたの、良人の氣風として、とても冷靜な

傍觀的態度は持續し得まいと、考へて居ましたの」

「はゝゝゝまさか、それほどでも無いがね、新聞記者としては千載の一遇、實に痛快な活動が出来るんだから、たまた無いよ、はゝゝゝ時に汝、どうだ、一番、乃公のために盡してくれないか」

「何をです」

「乃公の活動を助けて、くれないか」

「どういふ方面で」

「やはり、この事だよ、しかし、こりやア汝の考へ次第だ、決して命ずる理由でない、嫌なら嫌で宜いが、たと祕密だけは守ツて貰ひたい」

「おや、大變に何だか、むづかしい事ですネ」

「なアに汝の覺悟さへ極れば、何でもない、キツと出来るこッた、また乃公からは、

「汝より外に差當ツて適任者はないよ」

「ますく、任重しですか」

「全くだ、今、汝は、これまでの朋友と絶交しても動かない、かまはないと、言ツたね」

「いひましたよ」

「そこだ、すまないが絶交してくれ、單に新聞記者たる良人の活動を助け良人のために盡すのみでない、人道のために忍んで社會のために家庭の破壊者を防ぐんだ、つまり間牒となつて敵の參謀本部へ入り込んで貰ひたい、所謂反間苦肉の計だ、婦人倶樂部の最も信任さるべき特殊の會員となつて、いちくこの秘密を漏らして貰ひたい、いちくその作戰計畫を探ツて貰ひたい、無論、その以前、乃公は筆を極めて汝の去ツた事を遺憾なく猛烈に攻撃するからね、汝は其攻撃文を侮辱の極とし唯

一の證據とし乃至また手土産として駈け込んだ、そして我々新聞記者の態度を虚實とりまぜて具に密告するんだ、宜いかね、さうすれば婦人倶樂部は必ず汝を新なる好參謀として歓迎するに相違ない、加之も彼等は新聞社に對して最も神經過敏になつてるからね、その内幕を知るに最も便利なる新聞記者の妻は猶更厚遇するに相違ない、どうだ、これだけの事が出来るか、出来ないか、もし出来なければ以上一切、この戦ひの終るまで此まゝ秘密に葬ツてくれ、その秘密を守ツてくれるだけで、乃公は澤山だ、決して其れ以上を望まない」

良人は眼を光らして妻の顔を打守り、妻は眼を閉ぢて羞憤き、そのまゝ互に暫時の無言、されど無言の間は却て互の苦心慘澹、

「汝は今、妻なるものを以て妻とならざる以前の婦人とは思はない、或る程度まで或る意味に於て婦人の自由を奪はれたでなく寧ろ自然に消滅したものと思ツてる、

と、言ツたね、願はくは汝、この際、思ひ切ツて、この言葉を實地に行うてくれ、或る程度と或る意味は解釋のしように依るが、再び一個の婦人として世の中の自由に立歸らない決心の汝ならば、その生涯を託した良人の依頼は聞いてくれるだらう、もし一步を過れば永久に救ふべからざる人生の一大衝突に會する、乃公と汝の夫婦が内外相應じた活動は、必ず他日の誇りとするに足るが、どうだね」

「良人の意味は、よく諒解しました、よく、わかりましたが、どうも一種の罪惡を犯すやうで、疾しい事ですネエ、なるほど婦人倶楽部の主義は悉く非認しませんが、或る一部と現在の態度には全然、反對です、また妻として良人に服従する事も當然と思ツて居ります、たとへ出来ない事も苦痛には感じません、しかし私は此際、もし私の十分な希望といへば、たゞ動かないで居りたいんですよ、此際に動かないための絶交は甘んじて受けますが、わざわざその中へ間牒となツて」

「新聞記者の妻になツた不運とでも諦めて、やれないか」

また暫時そのまゝの無言に差俯きしが、やがて振り上げし顔に決心の色、かゝる時の女は男よりも強し、

「やりませう」

「やる、やツてくれるか」

「やりませう、やらなければならぬ私と覺悟しました、やりませうが良人、成敗の如何に拘はらず私は、これがため、死にますよ」

「えッ」

「まさか刃物で殺されもしますまいが、精神的に自殺しなければなりません」

「なぜ、何故だ」

「良人は他日、夫婦の内外相應じて働いた事を誇るに足ると、思ツて在らツしやる

が、そりやア新聞記者としての良人だけです、良人に服従して首尾よく效を奏した妻にもせよ、また人道のため社會のために幾分を盡した私にもせよ、やはり私は女です、女として私の取った行動は味方からも決して譽めらるべきものではありません、まして敵からは猶更の事、所謂獅子身中の蟲で、油斷の脚下へ伏せて置く爆烈彈ですもの、實に恐るべき憎むべき私ですよ、喜んで迎へられ深く信じて許されるだけ、それだけ容易に祕密を探り得ますが、また一面それだけ同性を欺き同性を賣るの罪は重い筈ですからねエ、どうしても最後は精神的の自殺をせねばなりません」

良人は今更おもはず腕を組んで肩を擡めながら聊か躊躇の顔色、されど妻は決心の色いよ／＼堅し、

「いふまでもなく良人、やる以上、どうせ、これくらゐの事は覺悟しなければなりません、覺悟したとなれば私、もはや一身を賭して居ますから必ず、きつと、やり遂

げます、いづれにしても再び世間へ顔を出さない私ですから、その私が婦人俱樂部へ駈込んだ時は良人、あらんかぎりの筆を極めて、あらんかぎりの恨みと怒りを盡して、この私を遺憾なく完膚なく筆誅して下さいよ、もし萬一その筆に疑はしい點があれば、無効ですよ、折角の苦心慘澹も水泡に歸するか知れませんよ、私をして此事に成功さすも失敗さすも第一歩は良人の筆にありますからねエ」

「よし、乃公も、その覺悟で掛らう、良人のために自己を空しうすもの、これを貞節の妻といへば、昔と違つて今日の時勢に應じた貞女は、實に汝だ、感謝するぜ」

織田信長に於ける妙光禪尼に拍手喝采せし婦人俱樂部は、その鬼神も知らざりし大膽なるところを以て外に向はんとせしが、この恐ろしきものを却つて外より逆に受けたり、

其十一

今人の師にも就かず先輩にも學ばず、古人の糟粕も嘗めず参考も取らず、筆は天地の自然に化し心は宇宙の絶待に接し、森羅万象を直に捉へ來りて所謂る書神の祕命をうけたるもの、古今東西の美術界に新なる一大紀元を起すべき責任ありとは、世間いまだ承知せざれど本人みづからの自畫自讚、

されど美術家は美術家なり、この美術家の細君また婦人倶楽部の會員とは、運命のもてあそびし夫婦の配合、あまりに残酷ならずや、

六疊の一室を廣大無邊の天地として、棊に張れる尺三の絹を大善美の宿るべきところと心得、日陰の青瓢箪に等しく人間の血色なき面を傾け手を伸ばして、將に神來の筆を下さんとする一刹那、

さりとはは良人の天職に心なき不似合の細君、その背後より蓄音器の如き聲、

「ねエ良人、ちよいと良人」

もとより振り返る筈なく、書絹に眼を注いで筆を宙に浮べしまゝの舌鼓、細君なほ去らず、

「良人、良人ツてば」

良人は二度目の舌鼓、細君ますますく癡走りし聲、

「用があるンですよ」

「うるさい」

「うるさくツても良人、用があるンですから」

「後で聞く」

「後では困ります」

「見えないか」

「何がです」

「ちよツ、これが見えないか、今、筆を下しかけてるぢやアないか」

「盲目でないから見えて居ますよ、見えて居ますが良人、此方に見て居れない事がありますからさ」

「其方の事は知らない」

「知らないで済みますか」

「済んでも済まなくツても今ア、いけない」

「いけない」

「いけないとも、將に乃公の筆が何物かに同化センとしつゝあるところだ、いけない」

「おや、いけないで米屋が無事に歸りますか、今日は臺所で居坐ツてますよ」

「俗悪な奴だな、勝手に居坐らして置け」

「さうは良人、いつまで勝手に居坐ツて居ませんよ、何とかしてやらなければ」

「居坐ツて居れなきやア歸るが宜い、米鹽のため乃公にの筆が止められるかい」

「乃公の筆、乃公の筆ツて良人、それを描き上げて幾何になるんです、夫婦たツた二人が米屋に居催促を受けて、乃公の筆もありますか」

「現在の賤しい金銭上で論じられる乃公の筆でない、他日の不換金だ、國寶になるべきもんだ」

「他日より現在の不換金が困りますよ、もう今日は私、言譯が出来ませんから良人、出て下さい」

「馬鹿ツ、物質上に關して居れるかい」

「私も、かう貧乏世帯の言譯ばかりに關して居れませんからね、是非とも良人、良人」

たゞさへ口も手も八丁の細君、ぐいと其袖を引けば、五六度も墨を含めて思案の宙に浮べし穂長の畫筆より、ぽた／＼と眞ツ白な絹の上に眞ツ黒な三四滴、おまけに入らざる筆力あまりて斜に一本、すつと餘計なものまで太く引いたり、や、怒るまい事か神來の畫伯、我を忘れし憤怒は其まゝの肱鐵砲となりて、ずどんと後方へ一發、生憎細君の顔の中央、きやつと叫ぶや否、鼻血を出して武者振り付けば、筆も絹も硯も繪具皿も四方へ飛んで、めちやく／＼の大騒動、臺所に居坐りし米屋の中小僧、驚いて一散に遁け出しぬ、

「さア良人、さア私を良人どうでも、して下さい」

「此女、怪しからんぞ此女、苟も美術家の妻として、やア痛い、痛い、痛い、こら

放せ、放さないかつ」

「放して堪りますか」

「乃公が堪らん、放せ、放してくれツ」

いつまでも仲裁の來ぬ夫婦喧嘩、やう／＼左右へ離れしが、腕力では逆も叶はぬ美術家ます／＼青くなりて眼ばかり光らせながら、はツ／＼と苦しげの息を吐けば、手を引いても口を引かぬ細君、袂の紙に鼻血を押へて猶更の勢ひ、

「私を良人、かういふ酷い目に逢はして宜いんですか」

「どツちが酷い目に逢った、これ見ろ、折角の絹が、こんなになつたぞ」

「絹ぐらゐ何です、一枚の絹と妻とを換へられますか、絹の上の墨と私の鼻血と比較になりますか、大體、さういふ良人の間違つた料簡だから、わづか五圓か六圓の事に居催促を食つて、こんな事になるんです、つまり良人のやうな人は獨身に限り

よ、妻を持つ以上、一家といふ事を考へずに濟みますかね、一家も一家、夫婦たゞ二人が殆ど世間と交際の無い一家をさへ満足に支へる事の出来ない良人は、やはり獨身の下宿屋住居か、用のない寺の座敷でも借りて自炊なさるのが分相應です、かりにも家を持ち妻を持つといふ資格はありませんよ」

「あゝ困った女だな、汝は美術家といふものを知らないから困るよ、そもく美術家といふものは」

「その良人、そもくを止して下さい、それを聞くと私、頭腦が痛くなるんです、どれほど良人、そもくを振り廻しても世の中の實際は、良人の、そもく位で自由にはなりませんよ、誰が良人の、そもくに驚くもんですか、私、そもくは大嫌ひ」

「いや、なるほど、考へて見ると無理はない、今日の識者とか具眼者とかいふ人間で

さへ、徒らに輪廓の技巧と色彩の匠氣に眩惑して、あはれむべし、まだ乃公の畫を知らないんだからなア、いくら妻でも女としては汝が乃公を知り得る筈がない、また美術家といふものは現在の眼前に知らるゝを以て、さらに誇りとすべきもんでな

「よ」

「ほゝゝ私、畫は知らないにしても、よく良人だけを知つて居ますさ」

「乃公を知つてる、どう知つてる」

「良人は嘘吐き」

「嘘吐きだ、いつ乃公が嘘を吐いた、俗世界の俗物どもは常に絶えず利益のために人を欺いて嘘を吐くが、たゞこれ眞美最善を希うて一切の物質的に何等の價値を認めない乃公は、いかなる場合も嘘を吐く必要がない、どういふ嘘を吐いた」

「よくまア良人、そんな事が、いはれますねエ、それが何より第一、嘘吐きの證據で

すよ、現在あれほど大きな嘘を吐いて居ながら、馬鹿々々しい、眞美も最善もあり
ますかね」

「こら、おら」

「こらおい、どころですか、こゝでこそ私、私の方から立派に、そもくくを出します
よ、そもくく良人、私を妻とするに就いて、どういふ新聞廣告を出したか、覚えて居
なさるでせう、年齢二十七美術家月収百圓以上、實は私も始めて逢った時、變たと
は思ひましたがね、まだ今よりも良人の風俗が多少、見よくって、あまり下等でも
ない素人家の二階借ですから寧ろ新に一家を持つといふ點に希望を抱いたのが大間
違ひ、さア一家を構へた後は、どうです、良人の月収が百圓以上、まア呆れた事、せ
めて以下とでもあればですが、ほゝゝありやア月収でなく年収なんでせう、自分
が生涯の妻を娶るにも始めから大膽に、あんな嘘を吐く良人だもの、この私に向ッ

ては生涯を欺いて居ますよ、私は欺かれて良人の妻となつたんですよ」

「さう汝、さう、いはなくツても宜からう」

「今までの私なら此まゝ生涯、馬鹿にせられて居るかも知れませんが、此頃の私とし
ては」

「ふむン、今までと此頃と、違つてるのか」

「違つてますとも、今までは良人に欺かれて良人に囚はれた私ですが、此ごろは妻と
いふ名稱よりも婦人といふ事に自覺したからです、闇いところから明るいところへ
出たからです、罪を犯して自由を奪はれた監獄でも空氣の流通と日光の工合に注意
の行届いた今日、誰が社會と没交渉の此うす闇い一種の座敷牢に生涯を埋めて置け
るもんですか」

「や、汝、出る氣か」

「もし私が欺されて良人の妻になつた最初を、あるところへ告白すれば良人、たゞ私が無事で出ただけでは済みませんよ、大變なこつてすよ」
こゝまで手強く無遠慮に押込まれても、まだ婦人倶楽部とは氣の付かぬ美術家先生、頻りに小首を捻りて眉を蹙めながら不思議の顔色、いかにも門外の事情に疎く社會に遠ざかりて、人間放れのせしところあり、
これで結局こゝも夫婦の泣き別れ、いや良人は現在の悲哀に泣けど妻は不運を免れし微笑を含んで、

其十二

いたるところ四方に生活難の悲鳴を聞く今日、兎も角も生活に重きを置かずして、それ以外に何等かの仕事を持てる當世男十餘人、この頃相集まれば必ず婦人倶楽部を談

話の随一として、いづれも既に多少の手負ひとなりし無念骨髓の連中、
「どうだい君の方は、どこの家庭も怪しい風が吹いて雲行の面白くない時だから、當分お互に差控へて居るが、その後は相變らず奥方、ますます御機嫌よく入らせられるかね」
「なかく御機嫌よく入らせられない、まだ御動座はないが頗る不穩の狀況を呈して
るからね、残念ながら君、まるで腫物に觸るやうだ」
「しかし困つたね、めい／＼何とかしなきゃアなるまい、いつまで此ま／＼ぢやア安心が出来ないぜ」
「ところが、うツかり何とかかされないよ、する以上、叩き出す覺悟がなくツちやア無効だ」
「叩き出せば宜いぢやアないか、入れたものを出すに何の遠慮があるもんか、腫物に

觸るやうな氣だから、ますく圖に乗ッて始末に困るんだ、觸らずに捻ぢ伏せたまま
ンま押し潰してやれよ」

「は、は、は、さういふ君は全體、どうだい、一週間も前に京阪へ旅行して不在中の君が
二三日以前、例のを連れて上野の宵闇に池の端の散歩といふ洒落たところを、だし
ぬけの不意に見付けられたさうだね、は、は、は、どうした、どうなッたね、別して此
際だ、参考のため是非とも聞いて置きたいよ」

「や、さう朋友にまで普く知れ渡ッた上は、もはや具に白狀するがね、驚いたよ、驚
いたね、今までと違ッて、細君猛烈の折柄だ、猶更以て驚かざるを得ないよ、は、は、は、
實際、商用で京阪へ出かけた事は出かけたが、案外早く濟ンで一週間の豫定に三日
を餘したのが禍ひの基だ、この機を逸すべからずと最大急行で新橋へ着いた時、ど
うも怪しい、あとで考へると、あの時に誰か御注進した不埒者があッたらしいね、

無論、女さ、まさか男で返り忠をする奴はなからう」

「は、ア、そりや堪らない、新橋へ着いた時、はや既に露現した理由だね」

「どうも、さうらしいね、お互に油断のならない世の中だぜ、さうでなくッて僕の御
臺所があの時分あの池の端を通る筈がない、もう君、十時を過ぎてたよ、つまり穴
まで御詮議が届いて居たから出るのを待ち受けて、八時頃から後を躡けられたんだ
ね、神ならぬ身の」

「やれ、念が這入ッたね、わけて君の御臺所は音に聞えた名高いもんだ、世間普通
の嫉妬者でないから二本の角も眞ッ直に生えず、くしゃく横に枝が出て鹿の角だ
といふくらの評判だぜ、さぞ手厳しかッたらうなア、お察しする、同情するよ」

「いくら察して貰ッても同情して貰ッても、おッ付かないよ、加之も例のは見た事が
なし僕は近眼と來てるだらう、おまけに宵闇の星明りだ、大體に最初から運が悪い

よ、ばったり顔と顔が出ツ喰はすまで知らなかつたとは、なさけないね、おや良人やア汝、雙方その場は以上これツ切り、これツきりの幕で別れたから君、ますく堪らない、本舞臺が後に残ツてるよ」

「どうした、すぐに歸ツたかね」

「もう自棄だ、毒皿主義で昨夜まで二日、ぶん流しの蠻勇を振ツた」

「は、は、蠻勇の後の悄氣方が面白かつたね、眼に見るやうで、は、は、は」

「面白いどころか、いやはや、お談話にならない、たゞの會員と違ツて近頃婦人俱樂部へ隣繰金を五百圓も、寄附したといふ凄じい勢ひだからね、驚天動地、なま優しい責苦ぢやアないよ、怖ろしいもんだね、あゝなると君、逆も人間の女として向へないぜ、まして自分の妻とは猶更思へない、まるで惡鬼羅刹の形相だ、加之も僕のは出て行くとはいはない、婦人の權能を無視し婦人の神聖を侮辱したと、良人を捨て

て出て行くのは君よほど手輕い部だぜ、僕の細君さらに頑として動かないね、どツかと坐して宣はく、今度の戦さに一萬圓を寄附して下されば堪忍するといふ高壓的だ、その堪忍も君、過去に於ての堪忍だぜ、今までの事だけは許してやるといふ意味の一萬圓だ、これから後は將來また改めて罰金を仰せ付けられる理由だが、どツだい、どツちが侮辱されてるね」

「や、まさかと思ツたが、そこまで來れば我々も此まゝぢやア居られない、朋友一人のためでなく、天下のためだ、一場の座談でなく、本氣の沙汰で起たう、無論、君、一萬圓の馬鹿ア盡すまいね」

「知れたこツたい、一萬圓は儲置いて、鼻アが隣繰金の五百圓を逆に取戻す決心だ」
「面白い、面白い、いくら入費が掛ツても面白い、無資産の妻なるものが良人の財産を良人の意志の反したところへ一言の相談なく許可なく、自由に送ツた金の取戻し